

# 同友会だより

vol. 19 2026. 4.20

発行：在日韓国良心囚同友会

## 「第3次真実和解委員会」での再審無罪拡大と、 民主発展、南北和解と平和統一の実現へ！

在日韓国良心囚同友会・代表 李哲

いつも在日韓国良心囚同友会の活動を支援して下さる皆様にとって、今年も実り豊かな素晴らしい一年となりますようお祈りいたします。

良心囚同友会は昨年（2025年）、「在日韓国人留学生事件」（11・22事件、1975年）から50周年を迎え、支援者の方々とともに6月に「旧西大門拘置所」（現西大門刑務所歴史館）や民主人士が眠る「モラン公園墓地」の参拝、11月にはソウルの香隣教会と国会議員会館にて50周年記念行事を行いました。

また12月には大阪で50周年市民の集いも成功裏に開催いたしました。私たちは同友会の行事にご参加、ご協力して下さった皆様に心より感謝申し上げます。

2024年「12・3非常戒厳令宣布」から始まった尹錫悦一派の内乱から1年3ヵ月が経ち、ソウル地裁は2月19日、内乱首謀者の尹錫悦に対して無期懲役（求刑は死刑）、金龍頭・前国防大臣には懲



「11・22事件」50周年ソウル集会（2025.11.21）

役30年（求刑は無期懲役）の判決を下しました。

今年（2026年）の春からは、新たに「第2次総合特別検察」も出帆し、尹錫悦一派の内乱とあらゆる悪政を更に調査することも決まりました。

李在明大統領に対する国民の支持は70%に達しており、今年の6月に行われる統一地方選も韓国民主義にとって重要な選挙となるでしょう。

また李在明政府のもと、「第3次真実和解委員会」が発足することとなり、1次、2次の委員会で究明されなかった在日政治犯についても、引き続き調査が進むことになりました。

何名かの方が新たに再審を申請されており、今年も無罪獲得の嬉しいお知らせをお届けできるように取り組んでいます。

同友会は今年も、韓国、日本の民主市民の方々とともに韓国の「国家保安法」の撤廃と民主発展、南北和解と平和統一の実現に向けて一歩いっば取り組んでいく所存です。今後も皆様の温かいご支援をどうぞよろしくお願いいたします。

2026年4月

在日韓国良心囚同友会代表 李哲

### 目次

- 「同友会だより」巻頭辞（李哲）……………1
- 「11・22事件」50周年／大阪集会報告……………2
- 紹介「在日韓国良心囚同友会35年史」……………5
- 「11・22事件」50周年／ソウル①報告……………7
- 「11・22事件」50周年／ソウル②報告……………28
- 李在明大統領の公式謝罪！！……………30
- 在日韓国良心囚の日本での法的地位問題……………31
- 柳英数・金英姫夫婦 語りの集い……………32
- ハンギョレ新聞「梁南国さん関連記事」……………33
- 再審無罪の朴キレ氏家族への最終陳述……………35

## 「11・22事件」50周年の意義と 民衆連帯の課題を考える市民の集い

山田 隆嗣（孫裕炯氏を支援する会）

2025年12月20日に『「11・22事件」50周年の意義と民衆連帯の課題を考える市民の集い』が、主催「12・20市民の集い実行委員会」、後援「在日韓国良心囚同友会」で大阪（エルおおさか）で開催されました。主催者の予想を遥かに超える参加者、韓国からのゲストで定員108名の会場は、定員を超えて着席できない方がいらっしゃいました。参加者は127名とゲスト6名でした。集会を準備した一人として、ご不便をおかけした方々にこの紙面を借りして謝罪申し上げます、すみませんでした。

集いの司会は徐<sup>ソンス</sup>聖壽さんが担当され、てきぱきと次第をさばいていられました。

はじめに、在日韓国良心囚同友会代表の李<sup>イチョル</sup>哲さんが主催者あいさつを行ないました。大阪の市民の集いが、年末開催になった経緯などを説明され、11月21日・22日にソウルで開催された「国家暴力犠牲者と共にする癒しと平和の対話マダン」「国家暴力犠牲者と共にする癒しと平和の文化マダン」に参加して思ったこと、そしてこれからのことについて話をされました。

「在日韓国良心囚同友会は長い間ずっと胸に思ってきたことが二つあったこと。ひとつは私たちの血と涙が染み込んでいる西大門拘置所跡内に、長い期間、多くの在日韓国人が苦勞したことを記録として残す記念碑を建てたいということ。もうひとつは西大門拘置所跡の広場の芝生の上で日本の救援運動のなかで歌われてきた歌を、日本から歌手を呼んで韓国の歌手とともに歌う音楽の集いを開催したいということでした。

記念碑の代わりに、自分たちが獄中生活を送った西大門拘置所獄舎第11舎3号室に「在日同胞展示室」が開設されました。音楽の集いは西大門拘置所跡ではなかったけれども、国会議員会館大会議室で日本から歌手の李<sup>リジョンミ</sup>政美さんに来てもらって成功裏に終えることができました。長年の思いが実現して喜んでいます。

ソウル集会で「11・22事件」に関する再認識をしたことは、自分たちは「11・22事件」は在日同胞留学生事件だと思ってきました。しかし自分たち以上に韓国内の方たち、学生、青年たちにも多大な被害をもたらした事件でもありました。もちろん頭の中では分っていましたが、今回のソウル集会時に



主催者あいさつ・李哲さん（2025.12.20）

自分たちの事件で被害を被った何人もの方々とお会いし、対話する中で彼らも我々以上に韓国社会において「スパイ」の濡れ衣を着せられ、家族は村八分にされて非常に苦しみを味わってきたということが、今更ながらに感じられました。

我々は今まで自分たちのことを訴えるだけで精一杯でしたので、彼らのことまで考えられなかった。しかし私たちがあまり認識していないところで、口に出せない苦しい思いをしていた彼らは、自分たちが棄てられた状態だと思っていたと思います。

私たちは以前から在日同胞の被害者たちを救済する「特別立法」を願ってきました。これからは我々在日同胞も含む、そして韓国内の日本関連の方々も同時に救済する「特別立法」を彼らとともに考えていかなければならないと強く思いました。これからことある毎に彼らと交流し、連帯しながら進めていきたいと思っています。

韓国の国会では、12月（2025年）に「第3次真実・和解のための過去事整理委員会設置法案」が成立し、来年（2026年）2月か3月には「第3次真実・和解のための過去事整理委員会（真和委）」が発足すると思います。私たちは第1次・第2次とあわせて第3次「真和委」と一緒に、在日同胞の悔しい思いを訴えて、再審で無罪を勝ち取ってほしいと思っています。

また韓国国内では今、「国家保安法」撤廃の動きが起こってきています。来年中には「国家保安法」を撤廃できるのではないかというふうに楽観するのですが、この動きが盛り上がった時には、私たちも韓国の民主団体とともに、そして日本の市民運動とともに「国家保安法」撤廃の声を上げていきたいと思っています。

来年も同友会はコツコツと皆さまとともにやっていきますので、どうぞ多大なご支援・ご協力をよろしくお願い申し上げます」とあいさつされました。

続いて、韓国での「国家暴力被害者と共にする対話マダン・文化マダン」を中心に準備・開催され、「大阪での集い」に参加するために来られた来賓6名の紹介がありました。

<sup>チョ ヨンソン</sup>  
① 曹永鮮弁護士・民主社会のための弁護士会：

「11・22事件」をはじめ国家暴力の被害者の皆さんへ慰労の言葉を申し上げます。とくに救援会活動をして、真のヒューマニズムというのが何なのかを見せてくださいました救援会の皆様へ、尊敬と慰労の言葉を申し上げます。



曹永鮮・弁護士

韓国に民家協（民主化実践家族運動協議会）という民主化運動、政治犯を救援する運動をする運動団体があるのですが、40周年を迎えました。50年に亘って救援活動をされた救援会の皆さま方は、ノーベル平和賞をもらってもおかしくない活動だと思っています。そういう意味で、もうひとつの主人公は救援会の皆さんではないかと思っています。

来年2月26日あたりに第3期の「真和委」が発券すると予想されています。「真和委」を未だ知らなくて申請できなかった方、家族の痛みなど、「真和委」が全てのことを解決できないと思いますが、国家暴力であったということを明らかにして、賠償などをできるようにして平和へ進む道を拓くことができればと思います。

<sup>キムミョンジュン</sup>  
② 金明俊監督・「朝鮮学校と共にする人びとモンダンヨンピル（鉛筆）」

はじめは在日韓国良心囚同友会のことはよく知らなかったのですが、李哲先生とはご縁があって6～7年前から、他の先生たちともご縁を深めて交流してきました。

ソウルでの『国家暴力の被害者と共にするマダン』を一緒に準備できて光栄でしたし、準備する過程で

我々活動家の皆も多くのことを学んできました。

救援会の皆さん、同友会の皆さん、折角このような行事を開催しましたので、また55周年、60周年の行事も韓国でやりたいと思っていますが（笑い）、また頑張っていきたいと思います。



金明俊・監督

<sup>ノ テファン</sup>  
③ 盧泰勲さん・民主化実践家族運動協議会幹事

久しぶりに日本を訪れて、救援会の先輩の皆さんとお会いして本当にうれしいです。

私は今回、同友会の皆さまのためではなくて、救援会の皆様へ感謝を申し上げるために来ました。



盧泰勲・民家協幹事

私が20代半ばの頃に皆さまとお会いして、今、私も60歳を過ぎたので30～40年間、皆さんとお付き合いさせて頂きました。昔、お元気だった皆さんが高齢になられて色々複雑な気持ちもありますが、またあらためて感謝申し上げて、ともに再会できる日までお元気で過ごされることを願います。

<sup>キムヨンファン</sup>  
④ 金英丸さん・

民族問題研究所・植民地歴史博物館対外協力室長  
10年前、民族問題研究所の『真実と正義』というところと「11・22事件」40周年のシンポジウムを開催したことがありまして、50周年の今年、韓国で是非やりたいということで民族問題研究所と対外協力室長として、私が一緒に生活しているということで、皆さまのことを深く知るようになりました。



金英丸・民間研対外室長

私は元々、戦後補償運動、とくに強制動員問題の活動家です。日本の市民運動の皆さんと連帯して強制動員、靖国遺骨返還訴訟などの戦後補償問題をやってきていますので、この救援会の活動、そして同友会の先生方の活動がどれほど韓国の民主主義への大きな役割を果たしてきたのかと、つくづく感じています。再審弁護団の一人、李相姫弁護士のパートナーとして、私が一緒に生活しているということで、皆さまのことを深く知るようになりました。

ソウルでの文化マダンの最後の場面で、李哲先生が涙を流している姿を、そして在日再審弁護団長で、のちに憲法裁判所の判事を務められた李錫兌（イソクテ）弁護士もたくさんの涙を流しておられて、私はやって良かったと思いました。

先生方は「もう歳だから、これが最後とおっしゃった」のですが、また3年後、5年後でも良いですよ。いつでもお越し下さい。我々、民主主義のために一緒に活動します。

発言はされませんでした。陳炯台、李玉分夫妻がいらっしゃいました。陳さんは韓国江原道東海に三陟という所で、当局がねつ造した「三陟スパイ団事件」で父親が死刑執行され、家族全員が懲役暮らしをされました。

#### 李在明大統領・禹元植国会議長からのメッセージ

つづいて「国家暴力の被害者とともに文化マダン」への李在明 大統領、禹元植 国会議長からのメッセージが朗読によって紹介されました。【資料掲載】

#### 連帯あいさつ、ソウル報告動画上映へ

そして団体連帯あいさつとして、金昌範 在日韓国民民主統一連合大阪代表、林真樹 ヨンデネット共同代表、郭辰雄 コリア NGO センター代表理事がされました。

つぎに、①映画『絞首台からの生還』（予告編）の上映と、共同監督の小山帥人の解説、②ソウル集会の報告として藪田正弘さん作製の写真動画映像上映と康宗憲さんの解説、崔アラム監督作製の記録動画の上映が行われました。



小山帥人・監督

つづいて市民の集い参加者の中から発言を頂きました。①熊本県球磨郡湯前町から駆けつけて来られた「李哲さんを救う会」の宮崎勇市さん、②「孫裕炯氏を支援する会」の新田和枝さん【感想文掲載】、③報告者の山田隆嗣、④「サポートユニオン with you」の島野正通さん、⑤「金元重君を救援する同窓生の会」の折原英信さん、⑥元毎日新聞記者の高村洋一さん、⑦「在日韓国良心囚同友会」の柳英数さんが発言されました。



康宗憲さん・同友会

ここでは、柳英数さんの発言を紹介します。「11・22事件」50周年、私にとって1977年に拘束されてから48年になりました。76歳になって、こうして語ることがいつ最期になるかもしれないと思うと真摯な心で、自分自身を振り返りどうしても語っておきたいことがあります。

1977年4月、私の拙速極まりない行動によって、兄弟、親戚はもちろん友人、知人も犠牲になりました。

た。また想像すらできなかった卑劣な方法

で、陸軍保安司令部とKCIAは韓民統（韓統連）を反国家団体に規定し、金大中氏を死刑宣告するための事件として捏造し、柳英数さん・同友会で大々的に新聞、言論に発表し、我々を徹底的に利用しました。そして数十年を経た今も、彼ら（韓統連）は祖国から迫害され疎外され続けています。今もなお、この事実を前にして生涯に亘り自分自身に深く自問し続けています。



柳英数さん・同友会

祖国の民主化のために何もできず、あまりにも多くの犠牲を払わせてしまったこと。祖国統一のために何もできず、あまりにも多くの禍根を残してしまったこと。この無念の後悔をして自身に問うことは、癒されることさえ許されない私の深い傷と一緒に真摯に生きていくこと。祖国の広範な民主化と平和的統一の課題に向き合い続けることだと思っています。

今回のソウル集会と大阪集会は、私にとって過去の拘束と拷問から獄中生活、そして釈放から結婚、そして現在にいたる韓国の現状を改めて振り返るひとつの貴重な契機となりました。

2024年12月3日の尹錫悦の戒厳令は、1970年代、80年代の軍事独裁政権を支えてきた反民主反統一の醜悪な勢力がいまだに堂々と闊歩し、韓国社会の奥深く潜んでいることを、あらためて露呈しました。今まさに民主勢力は内乱勢力の断罪、処罰を迅速かつ徹底的な実行を求めて、そして「国家保安法」撤廃の実現をめざして自身の生活の全てをとして闘い続けています。

彼らの闘いに連帯して、どうか二度と悲惨な犠牲を生まずに、真実が虚偽を暴き現存する社会の矛盾を打破する尊い力となることを祈ります。そして彼らの光の革命の勝利を願います。

この大阪集会にお集まりの皆さん、どうか今日が私たち平和を願う心からの連帯と未来へ向かう次の世代への希望と一粒の糧となるよう望みます。ありがとうございます。」

#### ソウル「対話・文化マダン」と大阪「市民の集い」

の一体としての50周年記念行事

金元重さんが「50周年・市民の集い」のまとめとして、最後に発言されました。

「まとめというよりも自分が印象に残ったこととして、まずは「11・22事件」50周年が11月21・22日のソウルの「国家暴力被害者と共にする対話マダン」・「国家暴力被害者と共にする文化マダン」

# 記念誌『分断克服と民主主義を求めて ～在日韓国良心囚同友会の35年史～』

編集：「在日韓国良心囚同友会の35年史」編集委員会

発行：在日韓国良心囚同友会

大阪で開催された「『11・22事件』50周年の意義と民衆連帯の課題を考える市民の集い」（2025年12月20日）の会場で、記念誌『分断克服と民主主義を求めて～在日韓国良心囚同友会の35年史～』が参加者全員に配布されました。毎月次の在日韓国良心囚同友会「連絡会議」の場で、半年余りをかけて論議を重ねて編集されたもので、良心囚同友会と日本人救援活動の歩み“35年史”が網羅された貴重な資料集です。ぜひとも手に取って、熱い想いを共有していただくことをお勧めいたします。

巻頭辞には、「50年前、地下室での過酷な拷問とねつ造された不当裁判により、私たちの獄中生活は自分の不甲斐なさを責める悲惨なものでした。そんな私たちに寄り添って、生きていく力を与えて下さったのが皆様の救援運動でした。私たちは皆様の支えによって自分を取りもどし、釈放後は良心囚同友会を結成して救援会の皆様とともに大小さまざまな取組みを企画し、韓国良心囚の存在を訴え、また韓国の民主化と統一運動に連帯しながら歩んで参りました。

この資料集を手にとれば、私たちと、そして取組みを共にして下さった救援運動の皆様をかけた“生きた証”が鮮やかに蘇ります。救援運動50年、そして同友会と共に35年間、本当にありがとうございました！今後も皆様の温かいご支援を、どうぞよろしくお願いいたします。」（2025年12月20日 在日韓国良心囚同友会代表 李哲拝）とあります。

## 《誌面の内容》

第1章 同友会結成と残された在日韓国人良心囚救援運動へ  
(1990年～2004年)

- 在日韓国良心囚同友会結成と10年間の取組み

第2章 韓国での再審裁判と公判支援活動の取組み  
(2005年～2015年)

- 再審裁判（真実和解委員会）への取組み

第3章 韓国内の民主化運動圏との共同行動の展開へ  
(2015年～2025年)

- 「11・22事件」50周年記念「ソウル◀▶日本連続行動」  
(2025年6月～12月)

第4章 在日韓国良心囚同友会35周年・資料編

- 良心囚同友会「資料室リスト（抜粋）」紹介

発行：2025年12月20日  
編集：編集委員会／在日韓国良心囚同友会  
装丁：A4版 オール・カラー並製本70頁  
冊子代（実費カンパ）：¥1000円（送料込）

## ■ 問合せ先（Mail）

事務局：korea@e-sora.net 李哲：leechul1028@yahoo.co.jp

と、12月20日の大阪の「市民の集い」が一体のものとして開催され、相乗して盛り上がり成功したと思います。

民主化運動の聖地といわれた香隣教会で「対話マダン」が行われました。教会は別の場所に移転してモダンな新しい教会に変わっていました。かつての教会は、映画『1987ある真実の闘い』の終盤での場面、指名手配を受け潜伏中の活動家・金正男キム ジョンナムさんが、治安本部対共分室の捜索隊から逃れるために教会の外壁の雨樋にぶら下がって、危機一髪で逮捕を免れるというスリリングな場面が出てきます。

李哲代表があいさつで、「今回参加して韓国内の「11・22事件」の被害者がたくさん居たのに思いが及ばなかった」と言いましたが、香隣教会に韓国内の「11・22事件」の被害者の田炳生チョン ヒョンセンさん、盧承日ノ スンイルさんたちが「11・22事件国内良心囚同友会」という会を作って参加して下さいました。

もうひとつ言いたいのは、在日韓国良心囚同友会と韓国の民主化運動の様々な潮流との結びつきです。詳しくは田村幸二さんが作成された資料集『分断克服と民主主義を求めて～在日韓国良心囚同友会の35年史～』の中の、私が書いた週刊金曜日



2015.12.25 掲載の『「11・22 事件」から 40 年 維新独裁の残滓が、いまま民主化勢力とせめぎあう韓国』という記事と、私のボイスメッセージ 2020.11.22 『「11・22 事件」45 周年 韓国民主化運動の現状を共に考える』を是非一度読んで下さい。

独立メディア『ニュース打破』の崔承浩 PD が「11・22 事件」40 周年集会の取材をかねて日本に来るときに、韓国の金浦空港か仁川空港かの出発ロビーで、1975 年 11 月 22 日、韓国中央情報部第 5 局対共捜査局長として記者会見で「事件」を発表した金琪春と遭遇して、突撃インタビューすることがありました。

金琪春はのちに、検事総長、法務部長官を歴任して、朴槿恵大統領秘書室長を務めた権力者でした。「11・22 事件の被弾圧者に続々と再審無罪が下されていることをどう思うか？」とマイクを突き付けて、執拗にインタビューを続ける映像が「11・22 事件」40 周年集会の会場で上映され、また映画『自白』



金元重さん・同友会

の 1 シーンとして出てきます。

「11・22 事件」の 40 周年集会がなければ、崔承浩 PD と金琪春が遭遇することもなく、映像も決して撮れなかったのですから、歴史の不思議な噛み合わせを感じました。

その金琪春を扱った『NHK アナザーストーリー 韓国衝撃の事件 ブラックリスト』が最近放送されました。再放送の機会があれば、是非ご覧になって下さい。」

集会の最後は、康宗憲さんの歌唱指導で「再会」を参加者全員で合唱し、終了しました。

### 「再会」 詩・曲＝許慶子

希望もとめて 旅立ったおまえ  
見送るわたしに 笑顔で手をふり  
あの顔をもう一度 わたしは見たい  
あの腕をうも一度 握りしめたい  
聞こえる 聞こえる  
おまえの呼ぶ声が

祖国の空は美しいと  
ひとつの絵はがき わたしに残して  
あの空のどこで おまえは苦しみ  
あの空のどこで 叫びつづける  
聞こえる 聞こえる  
おまえの呼ぶ声が



許慶子さん

..... 《 報道資料 》 .....

### 在日韓国人元政治犯 事件50年で集会

朝日新聞 2025 年 12 月 21 日

韓国が軍事独裁政権下の 1970～80 年代、母国に留学中の大勢の在日韓国人の若者らが情報機関に連行され、拷問で自白を強要されて「北朝鮮のスパイ」にされ、長期間投獄された。当時の代表的な事件から 50 年を迎えたのを機に在日の元政治犯や支援者らが 20 日、事件を考える市民集会を大阪市内で開いた。

集会には元政治犯でつくる「在日韓国良心囚同友会」のメンバーら百数十人が参加した。あいさつに立った代表の李哲さん（77）＝大阪市＝は、在日の留学生だけでなく、民主化運動をした韓国の学生も多く犠牲になったと告げ、「在日同胞だけでなく、韓国国内の人々も含めて救済する特別立法の制定を韓国政府に求めていきたい」と語った。

李さんは 75 年 12 月、韓国中央情報部（KCIA）

に連行され、「北のスパイ」として死刑判決を受けた。家族や支援者らの救援運動もあり減刑となったが、韓国民主化（87 年）後の仮釈放まで 13 年間投獄された。

李さんによると、李さんを含めて 45 人の在日留学生らがこれまでに再審で無罪となった。一方、拷問や投獄で心身に深い傷を受け、過去に口を閉ざしたままの人もいるという。

ソウルの韓国国会議員会館で 11 月下旬にあった事件 50 年の記念集会の様子も報告された。訪韓して参加した元死刑囚の康宗憲さん（74）＝京都市＝は当時投獄され、絞首台跡が残るソウル拘置所跡（西大門刑務所歴史館）を訪問した写真を交え、「6 年間死刑囚として過ごし、恐怖と緊張の日々で自分が執行されてしまう夢も見ました」と語った。今も悪夢に苦しむ時があるという。（中野晃）



（中野晃記者撮影）

【「11・22 事件」50 周年 in ソウル (2025.11.21 ~ 11.22)】

## 分断と暴力の時代を超え、平和と人権の時代へ

### 在日韓国人良心囚同友会が歩んできた道 ～「11・22 事件」50 周年ソウル集会によせて～

李 哲 (在日韓国人良心囚同友会・代表)

1975 年「11・22 事件」、在日同胞留学生スパイ団事件は、事件発生 50 周年を迎えました。私たちは 50 周年記念行事を、ここソウルで皆様と共に開催できることに深い感慨を禁じ得ません。

まず、この意義深い行事を準備して下さった韓国の主管団体各位と、主催団体としてご参加下さった多くの民主・人権団体各位に深く感謝申し上げます。

また、本行事にご出席下さった尊敬する知人、同志、先生方、そして今回の行事の会場を提供して下さった民主化運動の聖地、香隣教会の牧師さんと、教会関係者の皆様にご心より感謝いたします。

50 年前を振り返るたびに、南山の地下室に監禁され、数十日間も棍棒とあらゆる拷問で強制自白を強要され、殺されるかと思うほど殴られ、事実でもない供述書を書かざるを得なかった、考えるだけでも恐ろしく、苦痛に満ちた記憶がよみがえります。

日本で生まれた私たちは、母国留学を通じて祖国を学び、同世代の青年学生たちと時代情勢を共有し、祖国の民主主義回復と統一の日が早く訪れることを願っていたに過ぎません。

しかし、その無実の罪によって、私たちの若き夢と理想は根こそぎ引き抜かれ奪われ、私たちはその後、悪夢のような長い獄中生活を送らざるを得ませんでした。

私たちの青春は獄中で終焉を迎え、死刑執行の日を待つだけの死刑囚たちと、いつ出られるか分からない重い刑を宣告された 20 代の青年たちは、今ご覧の通り、こうして白髪の老人となりました。

誇り高き韓国人となって帰ってくることを信じて、母国留学に送り出した息子、娘を突然、刑務所に奪われた両親、家族の心情はどのようなものであったでしょうか？ 言葉では言い尽くせません。

しかし、刑務所を出た後、私たちは長い年月をかけて救援運動をして下さった日本の市民の方々と共

に、思い出すことさえも辛い 11・22、あの日を忘れないように、いえ、むしろあの日が私たちの誕生日であるかのように、毎年、記念集会を続けてまいりました。

本日、この行事にも救援運動を続けてこられた感謝すべき日本の救援会の皆様が 50 名以上も、ご一緒くださいました。本日、ご出席の良心囚同友会と救援会の皆様に、歓迎の熱い拍手をお願いいたします！

11 月 22 日の行事の中で、10 年前に開催した 40 周年記念行事は、私たちにとって忘れられない感動的なものでした。咸世雄<sup>ハム セウン</sup>神父と人権医学研究所、国内の拷問被害者の皆様が大勢で大阪までお越しになり、私たちを励まして下さったのです。

あの胸が熱くなる感動的な 40 周年記念行事で、咸神父はこうおっしゃいました。

「40 年前、在日同胞留学生たちがスパイだと糾弾された時、私たちは抵抗できず沈黙しました。韓国にいる韓国人として、過去に韓国政府が犯した罪について、被害者と在日同胞の皆様にご許しを請いたいと思います。」

咸神父の温かいお言葉で、私たちの鬱積<sup>うっせき</sup>した心ごたいへん慰められました。

1970 年代、80 年代に頻繁に起きた「11・22 事件」を含む在日同胞スパイ事件は、すべて合わせると死刑囚 9 名、無期懲役 19 名、10 年以上の刑期だけでも 29 名にのぼる、実に大規模な事件でした。しかも、すべての在日同胞事件が、当時の軍事独裁政権が危機に直面するたびに、恒例行事のようにならざるを得ず、発表したねつ造事件であったことは、今では広く知



られています。

若い日々を牢獄で過ごしましたが、その過酷な牢獄の中でも、私たちは与えられた青春を無駄にはしませんでした。刑務所に入ったからこそ、社会の最底辺に追いやられ苦しむ、見捨てられた民衆を胸に抱くことができ、また民主主義回復のために闘い、投獄された多くの青年学生や民主人士と出会うことができました。

また、社会から隔離され隠されたまま、刑務所で30年、40年の歳月をただ祖国統一だけを願い、全身を針で刺すなどのあらゆる迫害に耐えながら生きてこられた長期囚の先生方にお会いすることができました。

多くの方々がすでにこの世を去られましたが、彼らと共に獄中で民主主義回復のために闘い、彼らと共に民族分断の痛みと重荷を両肩に背負うことで、分断克服という作業に少しでも参加できたことは、私たちにとって大きな誇りです。彼らとの貴重な思い出は、今も私たちにとって心の宝であり、今日まで民主主義と南北和解を願い、胸を張って生きてこられた大きな源です。

私たちは出所して日本に帰ってから、1990年に「在日韓国良心囚同友会」を結成しました。その時、私たちは3つの誓いをたてました。

ひとつ、私たちは素手で社会に復帰した者として、これからの生活、仕事や子育てなどの問題に対して、互いに助け合いながら生きていこう。

ひとつ、刑務所から先に出た者として、まだ中に残っている方々が早く釈放されるよう努力しよう。

ひとつ、独裁政権によって刑務所に入れられた以上、わが国の民主化、統一運動と連帯しよう。

良心囚同友会は結成以来、救援会の皆様と共に、韓国の民主人士を招いた講演会、映画上映会など、大小様々な行事を続けてまいりました。その数多くの行事の中で、最も大きなものは、1992年5月から、大阪、神戸、京都、東京など、日本の5都市を巡回開催した「韓国良心囚書画展示会」でした。

この「良心囚書画展」は当時、新聞やテレビを通じて日本各地で大きく報道され、韓国の獄中に収監されていた1400名の韓国良心囚の存在を日本社会に広く知らしめることができました。

また、私たちの切実な活動は、1997年以降、北朝鮮（朝鮮民主主義人民共和国）で大きな水害発生や食糧不足が報じられた際に、7回にわたり行った「北朝鮮住民に愛と食糧を」という支援キャンペーンでした。被災した北朝鮮住民の実情を伝え、募金

## 【「11・22事件」50周年 in ソウル①】 分断と暴力の時代を超え、平和と人権の時代へ

### I. 国家暴力被害者と共に癒しと平和のハンマダン

・と き：2025年11月21日

・と ころ：香隣教会

①司会：金英丸（民族問題研究所対外協力室長）

②＜開会の辞および祝辞＞

・咸世雄（民族問題研究所／  
人権医学研究所・金槿泰記念治癒センター）

・田柄生（「11・22事件」国内良心囚同友会代表）

・キム・ヤンギ（国家暴力生存者の会）

③＜在日韓国人良心囚同友会が歩んできた道＞

・李哲（在日韓国良心囚同友会代表）

・田村幸二（日韓問題を考える東大阪市民の会）

④＜対話1＞

・康宗憲

（1975年ソウル医大スパイねつ造事件生存者）

・宮崎勇市／松本百合（李哲救援会）

・盧承日（「11・22事件」国内良心囚同友会総務）

・金孝淳（フォーラム真実と正義共同代表）

⑤＜対話2＞

・金英姫（巨文鳥スパイねつ造事件生存者）

・安野勝美（11・22在日韓国人

留学生・青年不当逮捕者を救援する会）

・金明沫（韓神大学事件被害者）

・曹永鮮（在日同胞政治犯事件再審弁護団）

⑥＜結びの辞＞

・文国柱（全国時局会議運営委員長）

・李錫兌（元憲法裁判所裁判官）

を集め、日本カトリック・カリタスを通じて中国産の米を購入して送りました。

私たちは刑務所を出所してからも、無念の念を抱えながら生きていくしかありませんでした。その骨に染みついた恨みを晴らす日がいつか来るとは、思いもよりませんでした。そんな中、思いがけず2005年5月に「真実和解のための過去事基本法」が制定され、12月に「真実和解委員会」が発足することを知り、翌年12月に「真実和解委員会」へ在日同胞事件の真相究明を求める申請書を提出しました。

実は当時さえも、韓国国内では在日同胞事件に対する理解が深まっていなかったでしょうし、私たちも当時は韓国に民主政府が樹立され、多少は民主主義が回復されたとはいえ、検察や司法府が変わったところで、どれほど改善されたのかと疑っていました。

しかし私たちの真相究明申請が受理され、「真相調査委員会」で在日同胞事件に関する調査が始まると、2010年10月には在日同胞として初めて再審

無罪判決を受ける事例が発生しました。その後も無罪判決が相次ぎ、現在までに45名が無罪判決を受けるという成果を上げています。良心囚同友会は今後も、最後の被害者が無罪判決を受けるまで、再審闘争を続けてまいります。

私たちは以前から、我々の恨み深い西大門拘置所跡地に小さな記念碑だけでも建てたいという願いを持っていましたが、咸世雄神父がご提案くださり、2016年6月、第10舎棟の牢獄に在日同胞展示室を設置することになりました。

また2018年12月、良心囚同友会は第3回「民主主義者・金槿泰賞」を、多くの出席者の祝福を受けて受賞しました。私たちは金槿泰議長の賞をいただきながら、今や在日同胞たちも韓国の民主化と統一運動の中で、同じ同志として認められたと実感し、感極まる思いを抱いたのを覚えております。

その後、2019年6月、文在寅大統領が大阪を訪問された際、懇談会の席で、ねつ造事件で犠牲になった皆様に国家を代表して謝罪するというお言葉を拝聴しました。そして今年2025年8月には、李在明(イジェミョン)大統領も東京で、偉大な民主化の旅路の中で多くの同胞が不当に苦しみを受けたとして、二度目の謝罪の言葉を述べられました。

私はかねがね、在日同胞事件はほとんどが内容も

文脈も同じようなねつ造事件であり、多くの被害者が一人ずつ救済されるには長い年月を要するため、全ての在日同胞事件を一括して特別法を制定し、一括解決する方式を望んできました。

これまでに死刑囚、無期懲役者を含む45名もの再審無罪が確定し、特に二人の大統領が国家を代表して丁重な謝罪の言葉を述べられたのですから、今こそ「済州4・3事件」や「光州5・18事件」のような在日同胞特別法を立法化できるのではないかと考えています。

明日も国会議員会館で「50周年記念行事」が開かれますので、この機会に、大韓民国国会と民主権政府が、在日同胞の被害者及び、我々の事件に関連して被害を受けた国内の全ての方々を救済するための「在日同胞関連特別法」を制定し、その後続措置も併せて講じてくださるよう訴えたいと思います。

在日同胞「11・22事件」が発生してから、早くも50年、良心囚同友会が発足してから35年が経ちました。私たちは、これまで懐かしい祖国を離れて生きてきましたが、いつも心は祖国の皆様のおそばにあり、これからも微力ながら、民主主義と平和統一のために努力していくことを申し上げて、私の挨拶を終わります。

---

## 「11・22事件」50周年ソウル集会メッセージ

田村 幸二 (日韓問題を考える東大阪市民の会)

本日の歴史的な50周年イベントの準備のために尽力されてきた韓国の各人士、そして在日韓国良心囚同友会、日本での救援運動メンバーに心からの敬意を捧げます。

私は、健康上の理由でソウルでのイベントに参加できませんでしたが、いつも心の中では参加されている皆さま方といっしょに居るつもりでいます。私のような小さな一活動家による救援運動や連帯活動の寄せ集めが、現在の良心囚問題の到達点の底の部分を支えてきたと確信するものです。

私の50年間は、中小企業の街、在日韓国・朝鮮人と生活を共にする東部大阪で、職場の同僚の実の兄さんが、韓国に留学中、軍部政権に不当拘束されたことに端を発し、地域ぐるみの救援運動を取組む

ことから始まりました。1975年、李東石氏。1984年、尹正憲氏です。

日本での救援運動は、1975年「11.22事件」以降、全国的に広がりを見せて、植民地・分断・独裁の3重の受難と向き合ってきた、9名への死刑判決を含めた百数十名の在日韓国人良心囚全員を、韓国民主化運動との連携で釈放を実現しました。

そして1990年に結成された「在日韓国良心囚同友会」との共同行動も、35年を数えるようになりました。

- ① 1992年「韓国良心囚が獄中で描いた書画の展示会」や、
- ② 韓国民主化運動の重鎮20名が参加された「40周年集会」(2015年)、
- ③ また、韓国から9名の弁護士さんが参加された

「祖国が棄てた人々」出版記念集会」（2018年）、④そして、「国家を代表して心からの謝罪を」という文在寅大統領「談話」（2019年）などのビッグイベントだけではなく、月次の「連絡会議」では、きめの細かい状況報告と再審公判支援行動の報告もなされてきました。

私たちは現在、資料集『在日韓国良心囚同友会の35年史』をまとめようとしています。

- ①第一章が「(同友会結成と) 残された在日韓国良心囚の救出運動」(1990年～2004年)」
- ②第二章は「韓国での再審裁判と公判支援の取組み」(2005年～)」
- ③第三章は「韓国内の民主化運動圏との共同行動の展開へ」(2015年～) です。

「再び暗黒の時代に戻ることがないように、後世の教訓とする作業が片時もおろそかにされてはならない」という同友会の叫びが、第一章から第三章まで貫かれており、それぞれの持ち場の違いを越えて、共に歩んできた救援会の50年を迎えるにあたり、貴重な成果と教訓を、次世代へ伝えていく大切な努力を続けていきたいと考えています。

『同友会だより』の最後のページに、共に歩んできた大切な仲間たちの“訃報”が並ぶことが増えてきています。しかし私たちは、残されたエネルギーを最後の一瞬まで燃やし続けていこうと思っています。良心囚同友会と韓国民主化運動との連携を大切にしながら……。

これからも、よろしくお願いいたします。

## 《 対 話 1 》

### 「11・22事件」から50年の想い

康 宗憲 (1975年ソウル医大スパイねつ造事件生存者)

野蛮の時代でした。残酷な歳月でした。祖国を求めて共に良い社会を作るべく尽力していた在日同胞留学生たちをスパイとみなし、死刑や無期懲役などの重刑を科し、山河が変わるほど長く獄中に閉じ込めたのです。一審担当検事は私に「反共を国是とする大韓民国において、被告人のような共産主義者、北朝鮮のスパイは生存を許容できないため死刑に処すべきだ」と言いました。裁判官たちも何の躊躇もなく、そのまま判決を下しました。

韓国情勢に疎かったからと、世間知らずの子ども扱いはやめてください。軍事独裁に苦しめられながらも、民主化と人権、平和統一への思いは、私たちも同じでした。だからこそ私は、上告理由書の末尾に「もし私のような取るに足らない学生にも死刑を与えなければこの国の安保が維持されないのなら、私も大韓民国国民の一人として我が国と民族のために、いつでも青春と生命を捧げる覚悟がある」と明記したのです。若気の至りでもなければ、ましてや自暴自棄でもありませんでした。日本生まれ育ちとはいえ、分断された祖国の痛みを同胞と共に背負いたいという切実な思いからの訴えでした。

維新の時代が終わり政権が変わっても、「祖国が棄てた人々」である我々の境遇は変わりませんでした。囚われの身の苦痛に加え、死刑囚として手錠をかけられた私の歳月は、人間の時間ではありません



でした。獣のような虐待を受けながら、獣のように生き延びました。しかし何よりも苦しかったのは、祖国に棄てられることよりも、社会から、人々の記憶から忘れ去られることでした。最高裁で死刑が確定したという報道だけで、私はすでに死んだ者となり、この世の人間ではなく、社会的に消え去った存在となってしまったのです。

では、私たちはどのようにして人間の尊厳を守りながら、あの苦難の時期を耐え抜くことができたのでしょうか？ 絶え間なく続く良心の隊列を、獄中で迎えたからです。この社会の矛盾から目を背けず、個人の幸福と安楽を追求するよりも、より良い社会、人間らしく生きる社会を共に築こうとする青年学生たちと労働者たちの堂々たる姿に、祖国の未来を見出したからです。祖国が、いや権力が私たちを見捨てても、私たちは決して祖国への希望を捨てませんでした。収監当時は在日同胞事件をめぐる韓国国内の状況は厳しく、獄中でも警戒と非難を受け、疎外

されてきました。しかし変革運動が進むにつれて、「大統領緊急措置」と「布告令」違反の時代を乗り越え、「反共法」や「国家保安法」の適用者が増える中で、私たちはいつの間にか苦難を共にする仲間、喜怒哀楽を分かち合う同志となり、ついに自由を取り戻しました。



康宗憲さん

こうして半世紀が過ぎた今日、懐かしい祖国で皆様と共に記念行事を行っております。感慨無量です。しかし、その感慨を全身で感じながらも変わらない現実に対して、私たちが担うべき課題を見逃すわけにはいきません。野蛮な時代、残酷な歳月を強いたあの悪法、「国家保安法」が今も生き続けているからです。国民の大多数は、民主主義と人権を蹂躪するその悪法の存在すら認識せずに、日常生活を送っています。過去の抑圧事例は再審で無罪判決を受けますが、今日も同じ悪法で有罪事件が作り出されるという呆れた現実を直視しなければなりません。「国家保安法」は決して過去の亡霊ではありません。

さて、その悪法の母体である「治安維持法」が制定されて、今年で100年です。もちろん日本では、その法律が廃止されて久しいでしょう。しかし、日本国民の力で廃止されたのではなく、敗戦後、日本

を占領した米軍政下で、噂にもならないまま消え去ったのです。自らの力で悪法を廃絶できなかったため、今なお日本の民主主義は基盤が脆弱です。「治安維持法」被害者の真相究明や名誉回復も全く進んでおらず、尹東柱詩人も日本の司法体系では、今も犯罪者に過ぎません。私たちは日本を反面教師とすべきです。

また、分断と敵対の時代を反映した憲法の領土条項と統一原則も、当然のようにそのまま維持されています。同じ民族構成員が樹立した国家と政権の実体を否定し「反乱集団」と罵倒しながら、どうやって和解と協力が可能なのでしょうか？ 南と北が元々敵だったため戦争をしたのでしょうか？ 戦争をしたから敵となり、その戦争を終えられずにいるからこそ、今もお敵として規定しているのです。

政権の寿命は短いものです。わずか5年です。王朝さえ長くても500年。しかし私たちは5千年もの間、同じ民族として歴史を継承してきました。だからこそ私たちは兄弟姉妹として出会う権利があるのです。同じ同胞を敵と規定するあらゆる法と制度を拒否しましょう。「国家保安法」の廃止と憲法の領土条項改正のために心を一にしましょう。それが野蛮な時代と残酷な歳月を生き延びた者たちの使命ではないでしょうか？

---

## 「11・22 事件」50周年に寄せて

宮崎勇市／松本百合（李哲救援会）

1975年12月「李哲が中央情報部に連行された」という新聞記事に端を発した私たちの李哲救援運動は、ここから始まりました。

「李哲さんを救う会」は日本全国10を超える地に結成され、「李哲さんを救う会全国連絡協議会」に結集し、全国で救援運動を展開しました。これほどたくさんの救援会ができたのは、李哲さんの家族とともに友人・知人・関係者が一体となって全国を飛び回り「李哲救援」を呼び掛けていった成果だと自負しております。

李哲さんを救う会全国連絡協議会は、「在日韓国入政治犯を救う会全国連絡会議」に結集し、さまざまな運動を全国的に展開しました。

また渡韓した仲間（日本の救援会からの渡韓者は趙万朝オモニを頼って行っていた）の情報や新聞記事などから得られる状況に対して、日本政府外務省

との交渉、在監者への差し入れ、手紙による励ましなど考えられるあらゆる手段を使って、獄中政治犯との交通が絶えないように取り組みました。

外務省の外交ルートで届けられる署名や薬などを目にした韓国当局は、日本政府が動いていることが分かり、簡単に極刑に処すことはできなかったはずです。

李哲さんは、理由にならない理由で何度も拷問を受け、精神的・肉体的に満身創痍になりながら、1988年10月3日ソウルオリンピック閉会式の翌日、釈放されました。「生きて帰ってきた」と、ひとまず安堵したものです。

釈放を勝ち取り、帰日した李哲さんを中心に「在日韓国良心囚同友会」を結成し、勢力的に運動を展



松本百合さん

開しました。

韓国が民主化され、2005年「真実・和解のための過去事整理基本法」が成立し、「真実・和解委員会」の活動を始め、在日韓国人政治犯に再審の道が開かれました。再審を申請した在日韓国人政治犯40名が無罪を勝ち取りました。2019年6月、大阪で文在寅大統領が在日同胞スパイ事件被害者に謝罪しました。李哲さんと文在寅大統領が握手をする姿をみて、感動しました。

私たちは、これで喜んではいられません。世界のあちこちで戦争状態にあり、罪もない数多くの子ども・女性・老人を含めた人々が犠牲になっております。また、ヒトラー・朴正熙のような暗黒の独裁政治を敷いているトランプ・ネタニヤフ・プーチン等々人が人々を苦しめています。

自国第一主義のもと排外主義が世界に横行しています。日本でも外国人規制強化をうたう政党が躍進

し、スパイ防止法の制定を画策しています。

大阪・泉南市ではトップで当選した市会議員の女性が、李哲さんが無罪を勝ち取ったにもかかわらず「李哲は北のスパイだ」と決めつけ、従妹の方とともにヘイト攻撃をしてくれています。私たちは、こういう排外主義と闘わねばならなくなってきました。

私たちは、日韓の民衆が連帯し、人々が真に平和な生活を送る社会を創造する運動を強化していくことが重要だと考えます。

最後に40年前のドイツ・ワイツゼッカー大統領の演説の言葉「過去に目を閉ざす者は、結局のところ現在にも盲目となります。非人間的な行為を心に刻もうとしない者は、またそうした危険に陥りやすいのです」を、もう一度、心に刻む必要があると思います。

これからも手を携えて闘っていきましょう。

---

## 「11・22事件」の国内良心囚

盧承日（11・22事件国内良心囚同友会 総務）

準備に尽力された皆様、再審勝訴のために多大なご支援を賜りました「在日同胞政治犯事件再審弁護団」、ならびに会場をご提供くださった香隣教会に、心より御礼申し上げます。

私は1975年10月18日、釜山大学キャンパスで中央情報部要員に逮捕され、中央情報部5局（南山）で捜査を受け、1975年11月1日に「国家保安法」違反、「反共法」違反などでソウル拘置所に拘束され、1977年1月14日に最高裁で懲役2年・資格停止2年の刑が確定し、1977年11月27日に大田刑務所で満期出所しました。また1979年10月31日に「緊急措置9号」「戒厳布告令」等違反で釜山中部警察署に拘束され、1980年12月頃、最高裁で懲役2年の刑が確定、大田刑務所で服役中の1981年3月3日、全斗煥大統領就任特赦で釈放されました。

二度投獄された経験を通じて、「国家保安法」や「反共法」などの違反で拘束された良心囚と、「緊急措置」違反で拘束された良心囚に対する国内の認識が大きく異なる点を体験しました。初めて「国家保安法」「反共法」などの違反容疑で拘束された時は、支持や支援を全く受けられず、孤立無援の状態の中で「赤」というレッテルを甘受せざるを得ませんで

した。二度目は釜山民主抗争に関連し、「緊急措置9号」と「戒厳布告令」違反で拘束された際には、国内の人権団体の支援と弁護士の方々が無料弁護をしてくださり、多くの方々が勾留金を送ってくださいました。

それゆえ私は、「国家保安法」の悪法性と残酷さを痛感しました。違法な監禁と拷問を恣意的に行い、民主化運動に活発に参加していた人権団体や民主人士を沈黙させた「国家保安法」がどれほど恐ろしい悪法であるか、それゆえ独裁者たちが「国家保安法」で縛ろうと躍起になってきたのかを理解しました。

『釜山民主運動史1』（釜山民主運動史編纂委員会、2021.7）218頁には「1975年になると、朴正熙政権は国内外で高まる民主化の熱気の中、維新憲法に対する賛否国民投票を強行した後、2月15日に人革党関係者を除いた「緊急措置」第1号、第4号違反者を大量に釈放した。これにより新学期の初めから大学街では釈放学生と教授の復学問題をめぐり文教部と学校当局間の葛藤が発生した。全国各大学で学生示威が相次いで発生した。朴正熙政権は4月



盧承日さん

8日、高麗大学に「緊急措置」第7号を発動し、軍隊を進駐させた。

4月11日にはソウル大学農科大学で金相眞烈士の割腹事件が起こった。4月22日現在、全国23の大学で除籍161名、停学61名など計222名の学生が懲戒処分を受けた」と記述しており、同書220～221頁には「このようにスパイ団事件としてねつ造されたことで、この事件は釜山大学の学生運動に大きな打撃を与えた。維新後期に釜山の学生運動が萎縮したのは、こうした公安事件の影響が大きく作用した」と記述しています。

上記の内容を総合すると、「11・22事件」は在日同胞留学生と国内大学生を連携させ、学生運動があ

たかも北朝鮮の指示を受けて行われている一部の不純団体の所業であるかのように宣伝扇動するために、中央情報部がねつ造した事件だという事実を認識すべきでしょう。数十年後、当時、スパイ団として拘束された人々のほとんどが再審で無罪が確定した事実を通じて、そのねつ造性が明らかになるでしょう。

被害者たちは当時、裁判を誤った司法府に対して公式な謝罪を要求すべきだと考えます。再審裁判過程において、個別裁判部では先輩判事たちの誤った裁判について謝罪した裁判部もあれば、謝罪しない裁判部もありました。したがって司法府の公式な謝罪を要求すべきだと、私は考えます。

---

## 祖国が棄てた人々との出会い

金孝淳（フォーラム真実と正義・共同代表）

私は長い新聞記者生活を経て、今は〈フォーラム真実と正義〉や〈イ・ヨンヒ財団〉などいくつかの市民団体に関わっていますが、この場に呼ばれたのはおそらく10年前に出版された『祖国が棄てた人々』という本のためだと思います。

当時は、まだ「11・22事件」という用語は事実上存在しませんでした。ねつ造スパイ事件の被害当事者と無造作に結びつけられたり、孤独に救援運動に身を投じてきた少数の活動家を除けば、「11・22事件」の意味を正しく理解している人は少数でした。そうした状況で、事件の背景や経過過程、再審運動などを総括的にまとめた本が出版され、私たちの社会にある程度の反響を呼んだと言っても、決して過言ではないでしょう。

ねつ造された在日同胞留学生スパイ事件の被害者たちの救援と名誉回復、精神的癒やしなどの重大性想起に小さな礎石一つを添えた者として、私が悩んだことや体験談のいくつかを皆さんと共有したいと思います。

私の話に入る前に、まず日本から来られた救援活動家の皆様全員に敬意を込めて感謝の言葉を申し上げます。50年前、維新独裁政権の手先たちがねつ造した事件を大々的に発表した時、韓国では誰もが口を閉ざしていましたが、被害者たちと特別な縁が

あるわけでもない普通の日本人が粘り強く救援活動を展開し、死刑囚を含む受刑者たちの無事帰還を勝ち取り、様々な連帯活動に継続的に参加しています。彼らの長年の苦勞と献身があったからこそ、



金孝淳さん

ここでも本格的な「11・22事件」記念行事が開催されることになったのだと、その意義はいくら強調しても足りないほどです。

<sup>インソクテ</sup>李錫兌弁護士など数名の方々の切実な要請で、本格的に原稿を書き始めたのは2014年6月頃です。そして翌年8月初めに本が出版されましたが、原稿はそれより3～4ヵ月前に出版社編集者に渡していたので、かなり速いペースで執筆作業を進めたこととなります。多少の無理が可能だった理由はいくつかあるでしょうが、最も大きかったのは誰にも言わないまま、自分自身に誓った決意です。

差別と構造的な不条理が蔓延していた日本で、青春の夢を諦めざるを得なかった在日同胞の青年たちは、新たな可能性を求めて祖国を訪れたものの、天刑にも等しい「スパイ」という烙印を押され、奈落へと突き落とされました。朝鮮半島で戦争の砲火が止んでから数十年が経っても、「赤狩り恐怖症」は

微塵も衰えていませんでした。スパイは赤色分子の中でも最も悪質な存在だという認識が幼い頃から刷り込まれてきました。つまりスパイは人間ではないので、人間としての待遇を受けることはできません。

スパイに仕立て上げられた同胞留学生たちは、突然、公安機関に連行された時から、取調室、拘置所、検察庁、法廷、刑務所など様々な場所を転々とする中で、人間らしい扱いを受けることは一度もありませんでした。これが民主化運動を展開した未だに「緊急措置法」違反などの容疑で収監された同世代の韓国内大学生たちの処遇と最も大きく異なる点です。国内学生の場合、重刑が宣告されても減刑措置や執行猶予などの特赦で釈放される道が完全に閉ざされていたわけではありませんが、同胞留学生たちにとっては長きにわたり絵に描いた餅に過ぎませんでした。

現在は死刑囚に一日24時間手錠をかけるという残酷な刑務制度は廃止されましたが、当時は裁判の判決時に検察の死刑求刑を受けると、その日から手錠をかけたまま食事をし、眠り、用を足さねばなりません。国内の学生が死刑囚となるケースは極めて稀で、仮に発生しても短期間で減刑措置が取られるのが通例でした。しかし20代の若さで死刑囚となった同胞の青年たちは、いつ絞首台へ連行されるか分からない恐怖に苛まれながら、最長で7年もの間、こうした非人道的な処遇を強いられたのです。

同胞留学生たちは長い刑務所生活を終えて日本に戻ることができましたが、そこでの生活も平坦ではありませんでした。個人的な経験に基づいて大まかに言えば、立派な肩書きの書かれた名刺を自信を持って差し出す人は、ほとんどいませんでした。概して自営業や肉体労働の職種に従事し、それでも状況が比較的良くて遅れて学業を再開した人は、学位を取得しても大学で職を得るのは容易ではありませんでした。

私は青春期に人生の様々な可能性を無慈悲に遮断された人々の物語を書きながら、本のタイトルを早くから『祖国が棄てた人々』と決めました。少々荒っぽい響きはしますが、加害の主体を明確にしたかったのです。受動態表現を多用し加害責任を曖昧にしてしまう日本式語法では、野暮ったい印象を与えるかもしれません。日本の司法府は今も、軍国主義時代に横行した自国民に対する国家権力の人権蹂躞・弾圧事件の再審請求をほとんど受け入れていません。

私が心に誓ったのは、人生そのものを否定された被害者たちに、「11・22事件」40周年を迎える前に、ほんの小さな慰めの贈り物として本でも贈ろうという思いでした。2015年8月初旬、本が出版されるやいなや十数冊をリュックに詰め込み、すぐに大阪行きの飛行機に飛び乗りました。現地に到着して最初に訪ねたのは、本に詳細に言及されている田村幸二という日本人です。日本の活動家たちが、ほぼ口を揃えて救出運動の主役の一人として挙げていた方です。私は在日同胞の被害者たちに本を届ける前に、あの長い年月、彼らのそばで揺るぎなく寄り添ってこられた、田村氏に象徴される日本人活動家たちに、まず敬意を表したかったのです。

私は多くの日本人活動家と出会い、率直に語り合う中で感動的なエピソードを数多く耳にしました。その中で私の心に最も響いた言葉があります。「自己否定」という言葉です。ある活動家は、若い頃、日本社会の進む方向性に悩みを抱えていた自身の世代が共有していた問題意識を「自己否定」という言葉で表現しました。誰もが高度経済成長の渦に飲み込まれてしまった時期に、大学を出て出世の階段を登ることだけに没頭することが、果たして意味のある人生なのかという疑問が湧いたといえます。そこで社会構造を根源的に変えるためには、自己を捨てて社会の底辺に入り、社会的弱者たちと連帯することが必要だという考えが広まりました。

こうした問題意識を共有した人々は、中小規模の工場に入り労働組合を結成したり、日雇い労働者が集まる人材市場で都市貧困者運動の組織化を試みしました。社会上層部の偽善や不条理に激しく抗議した1960年代の全共闘世代の学内闘争も、同じ文脈から生まれたものと思われます。

韓国では1970年代半ばに入り、いわゆる「学出労働者」が本格的に登場し始めます。学業を途中で投げ出し、身分を隠して労働現場に入り、労働運動の土壌を築いた彼らは、1980年代後半の「6・10大抗争」以降、「労働者大闘争」の主役となりました。そうした点で、日本人の救済活動家たちと韓国の民主化運動世代には共通する部分が少なくありません。「11・22事件」50周年記念式典を機に、この場に集まった人々の多くは70代の老人となりましたが、互いの歩んできた物語を分かち合いながら、両国の市民の真の友好、真の連帯の道を開く役割を、これからも担ってほしいと思います。

たとえ世の中が変わり時代が移り変わろうとも、自らを低め、低いところから連帯し共に生きる共同体を実現する課題の重要性は、決して色あせることはありません。今日、私たちはあの厳しい歳月を共に耐え抜き、ついに勝利を勝ち取ったと言えるでしょう。私たちは互いに抱き合い、苦労を分かち合ったと慰めの言葉を交わす資格が十分にあります。しかし、50年経った今も、留学生を含む数多くの在日同胞事件の中で、真相が明らかになったものよりも、そうでないものの方がはるかに多いという点を決して忘れてはなりません。

2018年11月『祖国が棄てた人々』日本語版出版記念会が、多くの方々の尽力により東京と大阪で盛大に開催されました。私はその席で、悲劇的に生涯を閉じた朴正起という人物について少し話しました。ソウル大学外交学科在学中、「11・22事件」の余波で中央情報部に連行され、過酷な取調べを受けた後、拷問の後遺症で精神錯乱を起こし、日本に帰国した青年です。彼は非正規のアルバイトで生計を立てていましたが、結局、餓死したと言われております。東京特派員として勤務していた時期、背景をもっと知るために、彼の昔の恋人に連絡を取ったのですが、何も話したくないと面会を拒否されました。

日本語版では在日同胞など韓国人の人名を漢字で表記するのが原則なので、朴正起という方の漢字名を確認できず苦勞しました。幸い、最年少死刑囚だった康宗憲先生が留学生関連ニュースレター『玄海灘』で見つけ出したと資料を送ってくれ、「正(正しい)」

「起(起き上がる)」という漢字名を載せることができました。名前の意味を解釈すれば「正しく立ち上がる」となるはずですが、しっかり立つこともできず無残に折れてしまった人生でした。私が式場でのスピーチで朴正起という名前を記せただけで本を書いて良かった発言したら、ある日本人記者がその言葉に深く感銘を受けたと共感してくれました。

私が本を書くためにお会いした被害者の中には、インタビュー中ずっと視線を避けながら、うつむいていた方がいらっしゃいました。思い出すこと自体が苦痛であり、今も心の傷が癒えていないからでしょう。韓国語版では取り上げましたが、日本語版では丸ごと削除した部分もあります。公安機関で受けた屈辱を子どもたちには、これまで秘密にしてきたが、それが知られれば困るという理由で、やむなく受け入れざるを得ませんでした。

あらゆる苦難を乗り越えて生き延び、この場に堂々と立っている被害者たち以外にも、何の慰めも受けられず虚しく消え去った被害者があまりにも多いのです。日本に戻って自ら命を絶ったり、全ての連絡を絶ち行方をくらました方も少なくありません。今この瞬間にも、老人療養病院で孤独に寂しく人生の終焉を迎える方々がいます。一人ひとりのこうした痛ましい事情を一つひとつ掘り起こし、二度とこのような悲劇が起こらないようにすることが、生き残った者たちの責務ではないでしょうか。この場が新たな決意の出発点となればと願ってやみません。

## 《 対 話 2 》

### 「11・22事件」50周年を迎えて

金 英 姫 (巨文島スパイねつ造事件生存者)

こんにちは。<sup>キム・ヨンヒ</sup>金英姫です。

「11・22事件」50周年を迎える席での挨拶をという提案を受け、「私が？」という疑問を抱きながら、8月23日、日本の東京で開催された在日同胞との懇談会での感慨深い時間を改めて思い返しました……。

あの日、私は光栄にも大統領夫人の隣の席に座っていました！

何が起きているのか全く理解できないまま、大統領夫妻と目を合わせ、乾杯し、一緒に食事をしながら



ら多くの話を交わしました。温かい慰めを受け、様々な思いが頭の中を駆けめぐりました。

尹錫悦が弾劾され、世の中が変わろうとしている

という希望に胸が熱くなりました。そうでなければ、私がどうしてあのような席に座ることができたのでしょうか。夢のような時間でした。

歴史の中で、私たちは長い年月、分断の悲劇の中で、どれほど多くの人々が統一と民主化のために闘ってきたのでしょうか！

先生方、若い学生たちの犠牲が、親は子を、子は親や兄弟を胸に葬らねばならなかった血の涙に染まった苦痛と痛みの歳月を、何をもって、どのように取り返すことができるのでしょうか？

1976年に同僚2名を射殺し自首した「キム・ヨンギョ自首スパイー巨文島事件」をご存知でしょうか？ 我が家の話です……。

分断された祖国で、朝鮮戦争の時に離ればなれになった兄弟を慕い、生涯統一だけを願っていたお父さん……。

北から下ってきた甥を、どうしても告発できなかったという理由だけで、過酷な拷問と暴行を受けました。そして虚偽の自白をしてしまい、私たち家族も獄中生活を強いられました。

ついに父は胃癌の末期で治療も受けられず、冷たい刑務所の中で死を迎えました。

50年という歳月が流れましたが、父を思い出すと拷問を受けた時の悲鳴、水を浴びせる音、刑事たちの怒鳴り声……連行されて数日ぶりに見た父……。

両耳からは血の膿が流れ出て、かさぶたが引っついて……。

母は恐怖に震え上がり、惨めな両親の姿は、まるで昨日のこのように鮮明に蘇り、胸をえぐるかのように痛むのです。

その時、私は19歳でした……。

そばにいた警察官が怖くて、何日も経ってから両

親に再会しても、温かい言葉一つかけられませんでした……。

もし時間を遡りあの頃に戻れるなら、私は両親の両手をしっかりと握り、父の耳から流れ落ちた血の膿をふき取ってあげたいです。

北から叔父を探しに来て……目も閉じられないまま射殺された……従兄の目を閉じてあげたいです……。

「ごめんなさい……安らかに眠っていとください……」と。

あの日のあの時を思うと、50年もの間、後悔ばかりで、ただただ申し訳なく思うこの気持ちを、いつになったら手放せるのでしょうか？

民主化がさらに拡大し、平等で平和な世界となれば、私たちの願い……統一は果たされるのでしょうか？

そんな日が来れば、先立たれた方々の魂も安らかに眠られるのではないかと考えてみたりします。そして家族の深い傷も少しずつ癒えていくことでしょう……。

先日の大統領の演説の中で……。

来るべき未来は絶望と不安に満ちた世界ではなく、希望と機会に満ちたものとなるよう国民と共に努力する……。

国民の潜在力を信じているからこそ、自信を持っているという大統領の言葉が、今も耳に残っています。

最後に……本日のこの場が……皆様にとって意義深い場となりますよう、そして祖国の明るい未来を夢見る私たちすべてにとって、温かな希望となりますことを願っております。

未熟な私にこの場に立つ機会を与えてくださり、感謝申し上げます。



金英姫さん

## 「11・22 救援会」の活動

安野勝美（11・22 在日韓国人留学生・青年不当逮捕者を救援する会）

私は「11・22 在日韓国人留学生・青年不当逮捕者を救援する会」の事務局メンバーであった安野勝美といいます。

1975年11月22日、中央情報部が「母国への留学生を装って、韓国の大学に浸透した在日韓国人スパイ21名を検挙した」と公表し、それが報道され

ました。その11月22日より以前から、彼ら彼女らの家族や知人に、また関係者には情報部に呼ばれている話は伝わっていました。何か大きなことが起こるのではないかという予感がありました。それらのこともあって、報道の直後から救援会が組織され、様々な形で救援活動が展開されました。

短期間で、日本全国で40を越える個別救援会がつくられ、渡韓活動（韓国訪問活動）、各地での情宣活動、集会、署名活動「百万人の署名」等、日本政府への要請行動、ハンガーストライキ等々、あらゆる取組みを行ってきました。国連への働きかけも行ってきました。その中で「11・22救援会」は、全体の動きを交流し、調整するためにも、毎月1回、大阪の高槻市の教会で、情報交換交流会を続けてきました。「11・22事件」関連の救援会だけでなく、1970年代に不当逮捕された留学生等を救援する人々も参加していました。

逮捕された彼らの家族、知人、友人、彼らの卒業した高校の同窓生や通っていた大学の関係者など、様々な人たちがそれぞれの救援会が把握している情報を報告してくれました。毎回の会議は、参加した者たちの学びとなりました。個々の救援対象者だけでなく、より多くの「被拘束者」の状況や、留学への思いや背景なども報告される中で、それらの事柄は在日韓国人にとって問題である以上に、日本人にとってもより大きな問題であることが理解されるようになったと考えています。そして「日韓問題」への関心が高まったところでもあります。

私が最初に韓国に来たのは、1977年、「被拘束者」の多くの刑が確定し、各地の矯正所に収監された頃です。矯正所での差入れをすることで、日本の家族や友人、知人をはじめとした人たちの思いを届けたいという気持ちで、韓国訪問活動を続けました。1977年から1980年初めまで、毎年数回の韓国訪問活動で、多い時には60名を越える収監者に差入れを行ってきました。

ただ、1980年の春に大阪の韓国領事館にビザを申請したところ、発給が拒否されました。韓国駐在

の日本の新聞記者が調べたところでは、「11・22事件」の頃の法務部の関係者が、ビザ発給の部署にも影響をかけて、救援関係者へのビザ発給に制限をかけているというようなことも聞きましたが、真相は分かりません。



安野勝美さん

1980年といえば「光州事件」を思い出します。しかし、一年後、何度もお願いしていた領事との話し合いが認められました。その話の中で、最後にビザ発給を約束してくれました。それから1980年代に「11・22救援会」は解散したのですが、私は1979年の大統領特赦で釈放され、日本に帰ってきた人たちの話から、それまで救援会も把握していなかった人の救援活動を友人とともに進めました。

私が1970年代から救援活動にかかわる中で、いつも頭の中にあったのは、小学校時代の同じクラスにいた在日韓国人の友達のことであり、勤務している中学校に在籍する在日韓国人生徒のことです。私は、何度も韓国訪問活動を行ってきましたが、救援会の集まりでは定例のようにその報告をして、その時の情報など伝えていましたが、時には授業の中で子どもたちに向けて「渡韓報告」を行うこともありました。

私が救援会の活動や教員の研究会や個人的なものも含め、韓国を訪ねた日数を合計すれば、一年を越えると思います。その中で学んだことは、たくさんあります。私の周りに、それをどれだけ返せているのか、まだまだと考えています。まだやること、できることは残っています。と言っても、今、私は若くありませんが、年齢は大きな問題でもないだろうとも思っています。まだ、宿題は残っています。これで挨拶を終わります。ありがとうございました。

---

## 分断時代の克服と統一朝鮮半島の未来

金明洙（韓神大学事件被害者）

2024年12月3日22時、尹錫悦検察ファシスト政権は非常戒厳を宣言し、「親衛内乱クーデターを起こした。北朝鮮共産勢力から自由大韓民国を守り、従北反国家勢力を一挙に肅清、自由憲政秩序を守るため」という名分を掲げた。民主主義の危機に直面し、目覚めた国民の団結した力、全国的なキャンドルデモ、そして東学農民軍の「牛琴峙の戦い」を彷彿

とさせた南泰嶺の大勝利に導いた農民たち、彼らと連帯した応援棒世代の「光の革命」は一体となり内乱クーデターを鎮圧した。目覚めた国民が主導する変革の新たな時代が開かれたのだ。全国民の集団知性で勝ち取った「K-文化民主主義」革命は、世界民主主義史の新たな幕を開いた。経済力や軍事力ではなく、文化大国となり、全世界に弘益文化を伝

播する国家を夢見た金九の願いが、まさに我々の目前で現実となりつつある。

6月4日に大韓民国第21代大統領に就任した国民主権政府の李在明は、就任演説で「私たちを分断した憎悪と対立の上に、共存と和解、連帯の架け橋を築き、夢と希望が溢れる国民幸福の時代を大きく開いていく」という抱負を明らかにした。ハン・ガン作家の言葉のように、今や明日の過去である今日の私たちが、後世の幸福な暮らしを築く時代的な使命を実感したのだ。社会的弱者の基本的生活が保障される社会、国民が主役の国、特権的地位と特恵が通用しない公正な社会を創りだすと、大統領が宣言したのだ。

8月23日には、李在明大統領は就任後初の訪問先として日本を選んだ。訪日の最初の日程として、東京市内のホテルで在日同胞らと昼食懇談会を持った。この席で大統領は、歴史の困難な局面ごとに進んで祖国に手を差し伸べてくださった同胞各位の熱い愛国心を記憶し、これに報いると約束した。

また、私たちが忘れてはならない恥ずべき痛ましい歴史を思い起こさせてくれた。1970年代、祖国の歴史と文化を学ぶために祖国を訪れた在日同胞留学生たちを迎えたのは、中央情報部と陸軍保安司令部だった。不法に拉致し、地下室に長期監禁したまま、あらゆる拷問と徹夜の取調べなど苛酷な行為の結果、彼らをスパイに仕立て上げたのだ。公安検察と司法判事は「国家保安法」違反、「反共法」違反、スパイ容疑をでっち上げ、最高刑という処罰を下した。独裁政権時代の民主化過程で犠牲となった在日同胞たちの痛ましい歴史を反省するとともに、大統領は国民の生命と安全を守るべき政府の責務があり、海外同胞の皆様も決して対象外ではないと述べた。

今回の大統領の日本における公式な謝罪は、韓国人としてこの事件に巻き込まれ獄中生活を経験した、当時、韓国神学大学の学生であったチョン・ビョンセン、ナ・ドヒョン、そして私にとっても大きな慰めとなった。私の潜在意識に内面化されていた「恨みのトラウマ」が癒される感覚さえ覚えた。

1972年10月、朴正熙は国会を解散した。国会を解散し、維新憲法を公布して終身執権を図った。しかし、維新廃止・民主回復を求めるデモが、目覚めた大学生と市民の間で瞬く間に広がっていった。これに慌てた維新政権は、維新廃止デモが北朝鮮の指令を受けて南に潜入したスパイたちの工作によるものと発表し、事態を收拾しようと試みた。

大統領が謝罪した「在日同胞スパイ団」事件も、

その一つである。1975年11月22日、50年前の今日だ。中央情報部は「学園潜入、在日同胞留学生スパイ団」の検挙を発表した。当時の中央情報部の金淇春は、北側の指令に従い母国の留学生を装って国内に潜入、暗躍してきた北側スパイ一味を一網打尽と、日刊紙で大々的に報じた。彼の主張によれば、北側は赤化統一を目的に留学生を装った北側工作員を南に送り込んだという。「統一革命党指導部」と「韓国民主青年同志会」を結成し、学生、宗教人、知識人を懐柔して社会不安を増幅させようとした。4・19のような決定的時期を醸成し、国家変乱を画策してきたとされた。この事件に巻き込まれた学生は在日同胞だけではない。釜山大学、ソウル医科大学、韓神大学出身の国内学生も16名含まれていた。



金明洙さん

私は常々、人生とは自分の計画通りに進むものだと信じて生きてきた。しかし現実はそのようではなかった。まったく予期せぬ出来事によって、人生が左右される経験を数えきれないほどしてきた。

私はエンジニアになることが夢だった。その夢を叶えるため工科大学に進学した。3年生の頃だった。1970年11月、平和市場の縫製工・全泰堇の焼身自殺事件が起きた。彼は同僚たちと共に「勤労基準法を遵守せよ！」と書かれたプラカードを掲げてデモ行進中、自らの身を焼いた。彼は私と同年だった。彼の焼身自殺は、それまであまり社会意識を持たずに生きてきた私にとって、大きな衝撃だった。どう生きるのが人間らしい人生なのか？自分の存在意義について自問するようになった。そして、その答えをイエスに求めるという確信が生まれた。私は歩みを止めた。1972年の春、韓国神学大学の門を叩いた。

その年の秋、朴正熙大統領は維新クーデターを起こし、大統領終身制を実施した。これに抗する維新撤廃運動が全国的に拡散すると、維新政権は「大統領緊急措置」を発動して、それらを阻止しようとした。維新に反対する市民や学生を次々と拘束した。国全体が維新の牢獄と化した。私が通っていた神学校では、これに抗議する象徴的な行動として、学生と教授たちが合同で断髪を行った。

1975年10月9日、夜明け前の早朝だった。私は正体不明の機関員たちに拉致された。気がつくと「我々は陰で働き、陽を目指す」という看板が目に入った。中央情報部南山分室だった。地下の取調室

に連行され、一ヵ月間、昼夜を問わず拷問を受けた。生き延びる唯一の道は、自分がスパイだと自白することだった。一ヵ月で私の身分は神学生からスパイへと変わった。

当時、私は学校の寮で生活していた。同じ寮に在日同胞の留学生がいた。彼は「韓国神学界の巨木、キム・ジェジュン牧師の神学思想を研究するために韓国に来た」と言っていた。私は彼と時々会い、様々な話を交わした。時には彼から、日本の地で差別待遇を受ける朝鮮人ディアスポラの悲哀を聞き、憐憫の情を感じたこともあった。

捜査官たちは、彼が平壤から特殊任務を負って潜入したスパイだと主張した。私が彼と会ったのはスパイとの会合で、交わした会話は思想教育に、食事代は工作金にすり替えられた。彼に懐柔された私は指令に従い、学生デモを背後で操ったとされた。一審裁判で公安検察は、私に「国家保安法」「反共法」「間諜」「大統領緊急措置 9 号」違反を適用し、無期を求刑し宣告した。二審で 10 年に減刑された後、大田刑務所と大邱刑務所を行き来しながら収監生活を送った。

1979 年 10 月 26 日、維新の心臓部に銃口を突きつけた事件によって、維新体制は崩壊し、私の釈放につながった。1980 年 1 月、大田刑務所を出所し

た。1580 日ぶりだった。釈放は私にとって、小さな牢獄から大きな牢獄への移監を意味した。「社会安全法」が待ち構えていた。日常生活は常に監視下にあり、居住区域を離れる場合は、該当機関に届け出なければならなかった。「5・18 光州民衆抗争」の際には、自宅軟禁を課されたこともある。職を得ることも、海外留学の道も閉ざされた。「国家保安法」が厳然と存在する現実の中で、社会的不利益に耐えながら生きていかなければならなかった。

我々の事件から 50 周年を迎え、一つ提案したい。今回の李在明大統領の謝罪は、それだけで終わらせてはならない。真摯な謝罪として実を結ぶためには、国家的な次元で二つの問題が解決されなければならない。第一に、国会と政府、市民社会は互いに協力し、韓国社会の基本矛盾である「国家保安法」の廃止に向けて尽力すべきである。これは後世に、分断が克服された統一朝鮮半島を継承させるために、私たちが解決すべき民族的な課題である。第二に、「11・22 在日同胞留学生スパイねつ造事件」の真相究明と被害者たちの社会的癒しに相応する、「特別法」が制定されるべきだ。これすなわち民族共同体構成員間の疎外が解消され、すべての人々に利益をもたらす弘益の世を開くための必須条件である。

---

## 在日同胞など、国家による「スパイねつ造事件」、その人権回復のための旅路

曹永鮮（在日同胞政治犯事件再審弁護団）

### 李宗樹・スパイねつ造事件

「真実・和解のための過去事整理委員会（以下、真和委）」は 2008 年 9 月 23 日、「国軍保安司令部は李宗樹を 1982 年 11 月 6 日に連行し、1982 年 12 月 14 日に拘束令状が発付されるまでの 39 日間、家族及び弁護人の面会を遮断したまま、不法監禁した状態で殴打などの苛酷な行為を加え、脅迫して虚偽の自白を引き出し、スパイ罪でねつ造した」として真相究明の判断を下した。

ソウル高等裁判所（2010 年 7 月 15 日宣告 2009 再審 42 判決）は、李宗樹判決文で「本件は、在日同胞留学生をスパイとしてでっち上げるため、民間人に対する捜査権のない保安司令部が安企部名義で被告人を不法連行し、39 日間強制拘禁した状態で拷問により自白を強要。それにより被告人が約 5 年

8 ヶ月もの貴重な青春を刑務所で過ごした事件である。

国家が反政府勢力を抑圧するための政権安保次元において、日本で生まれ育ち韓国語が不自由で十分な防御権を行使できないことを悪用し、在日同胞という特殊性を無視し、むしろねつ造捜査の対象として利用したことが本件の本質である。

これに対し、わが司法府は権威主義統治時代に違法・不当な公権力の行使により甚大な被害を受けた被告人に対し、国家が犯した過ちについて心から赦しを求めるとともに、刑事訴訟法第 440 条、刑法第 58 条第 2 項に基づき、本判決の要旨を公示するものである」とした。



曹永鮮 弁護士

## 在日同胞スパイねつ造事件の7つの特徴

### ① 在日同胞はスパイ創出の最も確実な材料

在日同胞は南北のどちらでもない第三者ではなく、南北のどちらとも関係を持たざるを得ない境界人だ。在日同胞たちは日本で近所に、あるいは血縁・学校のつながりなどにより朝鮮総連関係者との顔見知り関係や接触のある日常生活があるため、必ずしも朝鮮総連系や留学同出身でなくとも、在日北朝鮮工作員を経由した思想学習・指令授受・韓国への潜入・脱出工作の対象として、容易に利用された。ましてや朴正熙軍事政権に反対していた、いわゆる韓青同など民団非主流派（註1）はより一層、スパイねつ造の対象であった。

註1) 金孝淳 [祖国が棄てた人々] ソヘ文集、20頁

### ② 在日北朝鮮工作員の実体は立証不可能

被害者を思想指導し韓国に潜入・脱出<sup>コピョンテク</sup>するよう指令した在日北朝鮮工作員、すなわち高秉沢<sup>クマルモ</sup>にはソ・ソンウン、具末謨<sup>キム テホン</sup>にはキム・正体不明、金泰洪にはイ・〇〇、ナカムラ、李哲にはソ・セウォン、タナカ（註2）などの実体が、法廷で証拠として明かされたことはない。あくまで在日日本領事館に勤務する中央情報部要員が作成した領事証明書（註3）をもって代用されている。「国防部過去事委員会」は、領事証明書を作成する法的根拠もないまま、中央情報部または安企部職員が私的に作成した書類が、そのまま「在日北朝鮮工作員」に対する証拠として使用されたと明らかにしたこともある。実物もなく、口先だけの虚像が証拠となったのである。

註2) 李哲に対する再審判決（ソウル中央地方裁判所

2015年2月9日宣告 2011再考合 54判決 12頁以下参照）によれば、「本件公訴事実による場合、被告人に北朝鮮工作指導員である「タナカ」を紹介したというソ・セギョは2011年6月4日、被告人の弁護人に対し、自分は「タナカ」という人物を知らず、被告人に彼を紹介した事実もないという内容の陳述書（証第5号証）を作成して渡した。さらに本件記録上、被告人の供述以外に「タナカ」が実際に存在する人物であるか否か、あるいは彼が北朝鮮において具体的にどのような地位にある者であるかを、確認できる資料は存在しないと思われる」と述べ、北朝鮮工作指導員「タナカ」の存在を否定するに至った。

註3) 真相委、2009年下半期調査報告書 744頁

### ③ スパイは捕まるのではなく、作り出されるもの

保安司令部、中央情報部などに逮捕・連行された直後に繰り返し書かされる自伝的自述書は、まさに創作のスタートである。長期にわたり不法拘禁されながら書き、消し、破り、再び書き、殴られ、また書き直すという絶え間ない反復を通じて、少しずつ「スパイ」というアリバイを習得していく。少なくとも12日から51日（註4）にわたる不法拘禁の中で、何度も書き直し、破り捨てる過程で無力化され、一刻も早く地獄から逃れるために、捜査官が誘導尋問などを通じて要求する一定のアリバイを創作し、暗記していく。会ったことは接触となり、勉強を頑張れと渡された1万円は工作資金となり、渡された本は暗証単語帳となる。こうした繰り返される過程を経て自らをスパイと自覚するようになり、ついに虚構が真実となる。

註4) キム・ジャンホ、51日。

### ④ 想像を絶する拷問、残虐行為を受けた

未知の密室、あるいは南営洞や西水庫保安分室、あるいは南山中央情報部で表現できないような拷問を受けた。無慈悲な暴行、睡眠剥奪、電気拷問、水責め、唐辛子粉拷問など、反人道的拷問を受けた。特に一部の女性は、保安司令部などでの拷問・残虐行為を口外させないために強制わいせつ、強姦の被害者となった。高秉沢は出所後、1995年頃に作成した『私の記録』という手記を通じて、「たとえ『私が北朝鮮に行ったことがない』と言ったとしても、北朝鮮の地理に詳しくなかったなら、行ったと言ってしまうほど、彼らの脅迫と追及はそれほど恐ろしいものだった」（29頁）と証言している。

### ⑤ 保安司令部と中央情報部、安企部の競争物

在日同胞スパイねつ造事件の主体は、中央情報部及びその後身である安企部、保安司令部であり、互いに競争して創作した。特に保安司令官・全斗煥が大統領となった後の1980年代には、保安司令部によるスパイねつ造が目立つようになった。（註5）これは1970年代末に権力の座を握っていた中央情報部が、1980年までに実権を掌握した保安司令部との競争で後れを取ったことを物語っている。

註5) 「国防部過去事真相究明委員会」が明らかにした通り、中央情報部の日本関連スパイ事件は319件で、そのうち73件が保安司令部（機務司令部）事件であったことから、絶対多数は中央情報部、安企部による

スパイねつ造事件が多かった。1980年代以降の保安司令部によるスパイねつ造事件は、金泰洪(1981年)、李憲治(1982年)、朴栄植(1982年)、朴貞淑(1982年)、朴博(1983年)、趙一之(1984年)、尹正憲(1984年)、許哲中(1984年)など、若い「留学生」を対象に集中的に増加する傾向を示している。

#### ⑥ 転向工作及び「社会安全法」によって再び投獄

いわゆる左翼犯罪者を対象に仮釈放の可否及び刑務所内での書簡、面会、読書、診療及び処方箋などを差別したり、物理的暴力を振るうことで転向書を作成させた。思想転向制度の起源は、日本植民地時代に社会主義者や朝鮮の独立軍を弾圧するために制定された「治安維持法」にあり、思想転向を拒否した人民軍捕虜や両派スパイ、ねつ造スパイなどの非転向者(註6)は、すべての刑罰上の進級処遇の対象から除外され、あらゆる不利益な処遇を受けた。思想転向を強要される過程で生命の脅威にさらされたり、死亡に至ることもあった。(註7) 1975年には非転向長期囚、刑期満了左翼囚を転向させるために「社会安全法」が制定され、判決もない行政処分(註8)で保護監護所に閉じ込めた。「社会安全法」は1989年に廃止されるまで、徐俊植、姜鍾健ら155名が裁判もなく拘禁され、このうち15名が獄死した。(註9)

註6) 解放後、韓国における思想転向制度は、1) 朝鮮戦争時の遊撃隊活動に関連して逮捕された者、2) 南派工作員、3) 統革党、人革党、南民戦、欧米留学生スパイ団事件など、韓国における自生的変革運動の文脈で逮捕された者、4) 拉北された後に帰還した漁師、祖国に留学中に逮捕された在日同胞、5) 1980年代に入り増加した公安事件犯であり、三番目と四番目のケースではスパイとしてでっち上げられた事例が多いと「民家協」が明らかにした。「疑問死真相究明委員会」、ソ・ジェイル『転向工作及び疑問死』中592頁より再引用、真和委2009.11.3決定『転向工作関連人権侵害事件』参照

註7) 転向工作過程で死亡した事例として、維新時代に南派工作員として逮捕されたチェ・ソッキは、転向を拒否したという理由で1974年4月4日、矯正当局が一般囚人たちに暴行を命じ死亡させた。

また1969年に大動脈出血だったユン・ソクマン、1980年に肺結核にかかったユ・ジェイン、ヘルニアを発症したシン・チャンギルらは、転向しなかったことを理由に手術と治療を拒否され、獄死した事例である。「疑問死真相究明委員会」、ソ・ジェイル『転

向工作及び疑問死』中611整理。疑問死委は、チェ・ソッキ、パク・ユンソ、ソン・ユンギョ、ピョン・ヒョンマン、キム・ユンソンについて、転向過程の違法性に関する真相究明決定を行った。

註8) 憲法裁判所88憲力5.8。(併合)決定、89憲力44.85又343、保安監護処分更新決定無効確認。

註9) 特に、「疑問死委員会」の調査過程において、転向関連による獄中死亡者は1965年以降77名と把握している。「真相究明委員会」、ソ・ジェイル『転向工作及び疑問死』中607頁より再引用。

#### ⑦ 日本の救援会の活動を通じて救われる

韓国国内でスパイ団事件として発表されたか否かにかかわらず、「祖国」大韓民国ではすぐに「スパイ」という名で忘れ去られた。刑務所内ですら一般受刑者や、ましてや治安犯受刑者たちの間でも近づきたい忌避の対象であった。それでも被害者のための日本の「救援会」による、実に長い年月をかけた良心と献身的な努力があった。

法廷傍聴を筆頭に、嘆願書提出の組織化、拘置所・刑務所への面会、手紙やはがき送付、被害者家族支援、国連人権委員会や国際赤十字社、国際法曹家協会などへの訴え(註10)、日本の参議院など、議員を通じた救命運動など、数えきれないほどの救援運動があった。吉松繁牧師、女性画家の富山妙子など、日本の知識人たちの運動は、良心と思想の自由を求め続けた涙ぐましい旅路であった。李哲、康宗憲、趙得勳、李東石救援会だけでなく、孫裕炯、崔然淑救援会、具末謨、高秉沢など、ほとんどの「在日同胞スパイねつ造事件」の被害者たちには、小・中・高校などの同窓生や知識人、同郷人で構成された救援会が組織された。

一方、在日同胞スパイねつ造事件の被害者である高秉沢が1974年4月4日、祖国訪問中に突然逮捕されると、高秉沢が在職中だった日本駐在の日本通商産業省傘下「財団法人 海外技術者研修協会」職員をはじめとする在日同胞らは、「高秉沢氏を守る関西の会」(以下、高秉沢救援会とする)を結成し、高秉沢が大田刑務所へ移送後、出所するまで、嘆願書提出、法廷傍聴、面会など、釈放を目指して、あらゆる方法と絶え間ない取組みを続けた。

特に、高秉沢が通っていた「財団法人 海外技術者研修協会」は、高秉沢が不法に逮捕され拘禁されるや、母国である大韓民国が在日同胞である原告に対して行った苛酷な行為にもかかわらず、穂積五一先生をはじめとする「海外技術者研修協会」の職員たちは、「海外技術者研修協会事務所にある高秉沢

先生の机と本棚はそのまま置いてあります。そして高秉沢先生が戻ってくるのを待っています。高秉沢先生、5年後、10年後、もしかすると20年後に戻ってこられたとしても、必ずこの場所で高秉沢先生をお待ちしております」という手紙で励まし、ついに高秉沢は1981年8月15日に釈放、かつて使用していた事務用机と本棚に再会し、定年退職するまで同協会に勤めあげた。

註10) 金孝淳『祖国が棄てた人々』2015年、288頁以下

残された課題、何をすべきか／「在日同胞スパイねつ造事件」の被害者、再び法廷に立つ  
刑事再審手続は「真実」を回復する手続でもあるが、基本的に刑事法的な再審請求を通じて無罪を宣告される手続としての限界（註11）がある。刑事再審手続は、少なくとも人道的な観点から、不法逮捕、監禁、拷問などの残虐行為による公訴事実の創作、歪曲、誇張などを刑事手続を通じて確認する点に意義がある。したがって、「在日同胞スパイねつ造事件」の究極的な「救援」は、「一括立法」を通じて解決すべきである。しかし現状では困難な作業となるとしても、刑事再審及び国家賠償手続を通じて解決するはかない。痛恨の念を抱えて生きる被害者と家族に対し、慎重に再審請求を提案する。

註11) 要するに「在日同胞スパイねつ造事件」は、令状なしの逮捕及び長期の不法拘禁、拷問暴行などによる任意性のない自白、そして任意性のない心理状態が検察及び裁判段階にまで継続され、押収調書などは令状主義に違反して証拠能力がなく、また在日

北朝鮮工作員が北朝鮮または朝鮮総連の指令を受けた者であるという事実についての証明がなく、脱北、潜入、国家機密漏洩、間諜などの犯罪行為を犯したと認めるには不十分であるとして、無罪を宣告されたものである。

### 社会的癒しが求められる

刑事再審により無罪判決を受けても、特に韓国社会においては社会的癒しに至ることはなかった。実際、スパイ事件により韓国では同じ家で一人暮らしや下宿をしたり、交流のあった仲間たちが逮捕・拘禁され、拷問を受けたり、さらに有罪判決や除籍などにより人生のどん底に落ちたケースもある。それゆえ、たとえ再審で無罪を勝ち取ったとしても、未だに重い負債を背負いながら生きる者もいる。しかし、それを誰の責任と言えるだろうか。判決では癒されない過去の歴史を再検証し、互いの心のわだかまりを解きほぐす「皆の癒し」が必要だ。

### 歴史についての記録、まだ遅くはない

「在日同胞スパイねつ造事件」、及び日本救援会活動に関する資料調査と評価が必要である。散在する過去と現在の訴訟記録を集め、これらに対する総合的な研究と評価を試みることを提案する。歳月は過ぎ去り昔は残るが、その昔は記録されなければ秋の落葉のように散り去ってしまう。

若々しい青春はいつの間にか70歳を超えた老齢となった。しかし長い歳月の分だけ決して無駄ではなかった。苦難に満ちた歳月を耐え抜いてきた「在日同胞スパイねつ造事件」、国家暴力の被害者の方々に、敬意と心からの慰めの言葉を申し上げる。以上。

////////////////////// 《 国家暴力被害者と共に文化ハンマダン 》 ////////////////////////

## 文化広場・在日韓国良心囚同友会 挨拶

金元重（在日韓国良心囚同友会）

私は在日韓国良心囚同友会の金元重と申します。

昨日、香隣教会で行われた「国家暴力の被害者との対話の場」に続き、本日は1970～80年代の民衆歌謡などを中心としたコンサートが開催され、この貴重な催しに皆さまとともに参加できることを、たいへん嬉しく思います。

「11・22事件」から50年が経過しました。ここで、私にとって「11・22事件」とは何であったのかを

簡単に振り返ってみたいと思います。

私は日本で生まれ、日本の学校で教育を受けました。1974年春、大学卒業後すぐに韓国語を学ぶために母国へ留学しました。4月2日、父と共にソウルに到着し、翌4月3日には、海外同胞の子弟のために韓国語を教える、ソウル大学付属海外国民語学研究所に入学手続きを済ませました。しかし市内をバスで戻る途中、バス停横の新聞販売所には、民

青学連事件を大々的に報道する新聞が並んでおり、私の初めての希望に満ちた母国留学生活は、朴正熙独裁政権の厳しい維新体制下で始まったのです。

約1年間の語学課程を修了後、大学院に進学しました。1975年

10月、寮で突然、中央情報部に運行され、違法で苛烈な取り調べを受け、スパイとして起訴されました。日本の大学時代に参加していた民族統一新聞社での活動が、「国家保安法」違反の罪に問われたのです。

「国家保安法」「反共法」違反により、私は懲役7年の刑を受け、大田刑務所で服役後、1982年12月に出所しました。7年という刑期は、「11・22事件」の他の被害者、例えば13年間服役した李哲代表や康宗憲氏と比べると半分にすぎません。しかし、それでも決して短い年月ではありません。想像してみてください。7年間とは、高校3年間、大学4年間でまるまる刑務所で過ごしたことになります。私の青春、20代の大半は刑務所や拘置所で過ぎてしまったのです。

ああ、花のようなこの青春！

しかし「無駄な年月」という言葉がありますが、私の7年間の服役生活は決して無駄ではなかったと考えています。多くの困難を経験しましたが、それは人間修行や自己鍛錬の面もあったと思います。

私は2013年3月、再審裁判で無罪を勝ち取りました。それまで再審で無罪になる日が来るとは夢にも思いませんでしたし、再審には関心もありませんでした。

しかし在日の良心囚として、最初に再審を申請して無罪を勝ち取った李宗樹氏イジョンスが東京に来て「再審申請をすべきだ」と強く主張し、また別の友人も「なぜ再審申請をしないのですか？ 過去清算の一つの道として再審の門を大きく開いたことは、我が国の民主化闘争の大きな成果です。再審申請で無罪を勝ち取ることは、我が国の民主主義を盤石にすることにつながります」と説得してくれました。その大義に納得し、私も再審を申請しました。

現在まで、再審を申請した在日良心囚全員が無罪判決を得ることができました。これは民主化闘争を果敢に展開された民主主義勢力からの、ありがたい贈り物であると考えています。

話が長くなりましたが、「11・22事件」の被害者の一人として、改めて感謝の意を表したいと思いま



金元重さん

## II. 国家暴力被害者と共に文化ハンマダン②

- ・とき：2025年11月22日
- ・ところ：国会議員会館 大会議室
- ・プログラム：
  - ①コッタジ（願い、岩のように）
  - ②開会のあいさつ（司会：クオン・ヘヒョ）
    - ・黙想
    - ・大統領祝辞
    - ・ウ・ウォンシク国会議長あいさつ
    - ・咸世雄（民族問題研究所理事長）
    - ・金元重（在日韓国良心囚同友会）
    - ・住谷章（李哲氏を救援する大阪の会）
  - ③クオン・ビンナ（[テグム] シナウイ、荒野）
  - ④ソン・ビョンフィ（平和のメダル、朝露）
  - ⑤李政美（再会、誕生日、イムジン河）
  - ⑥合唱（再会、朝露）

す。

事件直後から裁判傍聴、面会、家族への慰めと励ましを惜しまなかった日本の友人、一般市民の皆さま、再審過程で献身的に尽力して下さった弁護団の皆さま、フォーラム「真実と正義」、人権医学研究所キムグンテ、金槿泰記念治療センター、再審に特別に関心を寄せて下さった「真実和解委員会」の調査官の皆さまに、心から感謝申し上げます。

また、今日の素晴らしい文化広場を主催して下さった「朝鮮学校と共にする人々モンダンヨンピル」の皆さまにも感謝いたします。

さらに感謝したい方々がいます。それは、報道、出版、放送を通じて「11・22事件」や在日良心囚の問題を韓国社会に広く知らせて下さった良心的ジャーナリストの方々です。

その一部を挙げますと、昨日、香隣教会でお話して下さった『祖国が捨てた人々』の著者・金孝淳先生キムヒョソン、ドキュメンタリー映画『自白』を制作されたニュース打破タバの崔承浩 PDチュスンホ、KBS インサイト・ドキュメンタリー『スパイ』および『スパイと島の少女』を制作された KBS 李浩京 PD などです。こうした良心的ジャーナリストの使命感と努力により、在日良心囚問題の真実が広く知られ、理解されるようになったのです。

以上で挨拶とさせていただきます。ありがとうございました。



## 「11・22 事件」から 50 年

住谷 章

大阪から来ました住谷です。

はじめに今日は、このような場を作っていただいた韓国の皆さんに感謝を申し上げます。今回、韓国の皆様の呼びかけに応じて、日本からは 50 人ほどの参加者がこの場に同席しています。そして、私もその中の一人として、この場に同席することが出来て、たいへん光栄に感じています。

しかし、残念ながらこの場に参加することが出来なかった人々が沢山います。「11・22 事件」以前から今日まで、在日韓国人政治犯の救援運動に参加した日本の人々は、この場に参加した人の数百倍、数千倍の人々が集会やデモ、救援署名に参加した結果、このような場に私たちが参加できたことを合わせてお知らせしなければなりません。

また、この場に参加することなく旅立たれた多くの人々がおられます。一人ひとりのお名前を申し上げることはできませんが元政治犯やご家族、救援会の代表を長く勤められた人々等々、多くの人々がおられることを合わせてお伝えし、ご冥福をお祈りします。

そして、私が 50 年近くこの運動に参加できた原点は、そうした多くの人と人との出会いとつながりです。今では、韓国と日本の直接交流が当たり前に行われていますが、当時は韓国の民主化と自主的平和統一に連帯する集会やデモがたびたびありましたが、直接韓国に出向いて連帯行動するなんて考えられない状況でした。

そんな状況下で私は、李哲さんの個別救援会に参

加し、1980 年 6 月に初めて韓国を訪れました。李哲さんが死刑から無期懲役に減刑されてソウル拘置所から移監されたあと、大田矯正所を 5 回訪問し、一度だけ特別面会が認められ、初めて李哲さんに会うことができました。もし、李哲さんが韓国で拘束されていなかったら、おそらく生涯出会うことがなかった人ですが、今では、とても大切な友人になっています。

李哲さんとは一度だけの面会でしたが、韓国に来るたびに趙萬朝オモニや関香淑さんには、たいへんお世話になりました。そしてお二人に連れられて韓国の民主化運動を共に闘っておられた多くの人々にもお会いすることができました。

また、日本でも李哲さんのご家族、特に大阪のお姉さん家族との交流は、私にとって救援運動を続けられた原点でした。

そして李哲さんが釈放され、帰日後に大阪に居住した後にも救援会を解散することなく、「在日韓国良心囚同友会」と共に今日まで活動を続けたことで、それまでよりもっともっと多くの韓国の人々との出会いと深い直接交流がありました。

このように人々との出会いとつながりが、今日まで活動を続けることができた原点でもあり、エネルギーでした。

そして改めて、この場に同席できたことを光栄で、とても感謝しています。ありがとうございました。



住谷章さん

## 李在明大統領・禹元植国会議長からのメッセージ

「国家暴力被害者と共にする文化マダン」の開催を心よりお祝い申し上げます

今年は国家独裁政権が罪なき在日同胞留学生たちの人生を根こそぎ奪ってから 50 年となります。民主化の過程で在日同胞留学生たちだけでなく、多くの国民が独裁政権の無道な国家暴力によって犠牲にされました。

痛みを乗り越えて勝ち取った韓国の民主主義はさらに堅固ではありますが、痛みを伴っていなかったらさらに良かったはずの、お一人、お一人の大切な人生です。

国家が行ったむごい暴力によって青春を踏みにじられたすべての被害者の皆さん、そして口にもできない苦痛の歳月を耐えてこられたご家族に対し、国家を代表して深い慰めの言葉をお伝えします。

大韓民国の民主主義は、多くの国家暴力の被害者に対して大きな借りがあります。政府は国家権力が

一瞬たりとも国民の上に君臨することがないよう、厳しい責任意識を持って必要な措置と実質的な支援を続けて参ります。

今日、この場が今まで胸の中に埋もれていた痛みを分かちあい、お互いに温かい慰みと力となる、連帯と治癒の時間となりますよう望みます。

もう一度「国家暴力被害者と共にする文化マダン」の開催を心よりお祝い申し上げ、すべての皆様の健康と幸せをお祈りいたします。

2025年11月22日 大統領 <sup>イジェミョン</sup> 李在明

こんにちは。国会議長の<sup>ウウォンシク</sup>禹元植です。

国会に来られたことを歓迎いたします。去年の冬、違憲で違法な非常戒厳に抗して、国民の勇気と献身により憲法と民主主義を守ったこの現場で、今日、この行事が催されることを意義深く思います。

人権と民主主義は完成されたものではなく、不断に省察して改善し、作っていく実践だと思えます。国家暴力が被害者と家族たちに残した傷は、時間が過ぎたからといって癒えるものではありません。国家暴力は過去のことでなく、今日を生きる私たちがどのような未来、どのような共同体を作っていくのかと問いただす歴史の質問であります。

反共が絶対的な価値で、真実は息することもできなかった時代、多くの人々が拷問とデッチ上げによってスパイとねつ造され、一つしかない人生を根こそぎ奪われました。家族の生活も踏みにじられました。

長い沈黙と無視、苦痛と絶望の時間が過ぎて、ついに真実が現れ始めました。被害者たちの勇気ある証言、人権市民社会の献身的な努力が、長い間、抑圧されていた真実の扉を開きました。そして再審と無罪判決が続きました。国家暴力の真実究明は被害者の権利回復を越え、民主主義を正しく立ち立て直す過程であり、今日、私たちが生きている民主主義は国家暴力被害者たちの犠牲に借りを負っています。

在日韓国人良心囚と救援会の皆さんをはじめ、この場に共にされたすべての方々に深い慰労と尊敬、感謝の言葉を捧げます。皆さんの意地と歩みが分断と暴力の時代を超え、平和と人権の時代に行く道を開いたという事実を忘れることはできません。

国家暴力の被害は社会と国家がともに背負わなければならないものです。たとえ被害の原状回復が不可能だとしても、国家が責任を持って過ちを正し、傷を治癒していくことで、再び同じような悲劇が繰り返されないようにしなければなりません。

国会も共にいたします。国家暴力の歴史が個人の記憶ではなく、社会的記憶として確立され、真実究明と治癒のための努力が完全に成されるよう、国会の役割を果たすつもりです。治癒と平和のハンマダンに心を寄せ、準備して下さったすべての方々に感謝いたします。ありがとうございました。

2025年11月22日 国会議長 禹元植

## 国家暴力被害者と共に文化ハンマダン



写真提供：  
Maco (藪田正弘)

## 「50年前スパイねつ造の苦痛、今は癒しと平和の時代に」 「11.22事件」50周年…国家暴力被害者と日本救援会員が対話のハンマダン

イム・ソクギュ 2025.11.22

維新政権のスパイねつ造で青春を奪われた在日同胞留学生と国内大学生、そしてこれらと35年間、連帯してきた日本市民が一堂に会した。

在日韓国良心囚同友会、11.22事件国内良心囚同友会、国家暴力生存者会など8団体が21日午後、ソウル鍾路区香隣教会で「11.22事件50周年－国家暴力被害者と共に癒やしと平和のハンマダン」の初日行事が開催された。

香隣教会の大礼拝室をいっぱい満たした参加者たちは、被害当事者の証言と日本救援会活動家の発言、再審弁護人団の分析などを聞き、朴正熙政権のいわゆる「学園侵入北塊スパイ団」事件の真実と、その後50年の道のりを振り返った。

先立って「11.22事件」は1975年、朴正熙政権が在日同胞留学生17人と国内大学生16人をスパイでねつ造した事件で4人が死刑を宣告され、2005年「真実和解委員会」の再審勧告以後、被害者が無罪を宣告された後、文在寅・李在明大統領が公式に謝罪している。

### 「死刑宣告され、人間以下の待遇

……“国家保安法”は撤廃されなければならない

康宗憲ソウル医大スパイねつ造事件生存者は「軍事独裁時代、スパイに追いつまされ死刑を宣告され、人間以下の待遇を経験した」とし、「国家暴力の根源である“国家保安法”を撤廃し、分断と敵対時代を反映した憲法領土条項を改正しなければならない」と声を高めた。

盧承日「11.22事件」国内良心囚同友会総務も、「11.22事件は、中央情報部がねつ造した公安事件であることが明らかで、残酷な国家暴力は学生運動萎縮に影響を大きく及ぼした」と指摘し、「司法部の公式謝罪が必要だ」と促した。

「キム・ヨンギュ自首スパイ事件」として知られる巨文島スパイねつ造事件の生存者である金英姫氏は「国家から酷い拷問にあった父は、ついに刑務所で胃がんで死亡した」と涙で証言し、「大統領懇談会で慰労を受けたが、50年が過ぎても傷が残っている」と吐露した。

韓神大事件被害者・金明洙も「在日同胞との出会いだけでスパイで追われて拷問と無期懲役を宣告された」と回顧し、「“国家保安法”廃止と被害者対象名誉回復、社会的治癒が必要だ」と強調した。

「日本全域40以上の救援会、全員釈放を導いて」



▲ 軍事独裁政権時代にねつ造されたスパイ事件で被害を受けた当事者が韓日両国から集まって、これまでの道のりを振り返って両国の連帯を蘇らせる時間を持った。

韓日問題を考える東大阪市民の会所属の田村幸二氏は、「1975年以後、日本内の救援運動が全国的に広がり、100人余りの在日同胞良心囚が釈放された」と説明し、「1990年在日韓国良心囚同友会結成後、35年間、共同行動・再審訴訟支援・出版記念会などの活動をつないできた」と明らかにした。

11.22在日韓国人留学生・青年不当逮捕者を救う会所属の安野勝美さんも、「11.22事件後、日本内に40以上の救援会が組織され、韓国訪問・署名運動・断食闘争、国連活動などを展開した」とし、「救援会活動を通じて日本社会内の在日韓国人問題の認識を拡散した」と評価した。

去る1975年、南山地下室で拷問と強制自白を受けて出所した後、良心囚同友会を結成して再審闘争を続けてきた李哲・在日韓国良心囚同友会会長も「被害者45人が無罪を受けたが、“在日同胞特別法制定”など制度的解決が依然として必要だ」と主張した。

### 「過去政権の国家犯罪反省

……社会的価値の大転換が必要

人権医学研究所・金槿泰記念治癒センター理事長の咸世雄神父は、「在日同胞被害者たちに過去、政権の拷問、投獄、殺人など国家犯罪を反省して許しを求める」とし、「50年が過ぎた今、祈念と復活の意味を被害者たちに伝えて治癒と平和のために祈る」と明らかにした。

「11.22事件」国内良心囚同友会代表である田炳生・韓国キリスト教長老会長と社会委員長も「中央情報部によって逮捕、拷問、虚偽の告白を強要され、家族が社会的苦痛を経験した」というひどい過去を思い浮かべ、「二度と国家暴力が起きないように社会制度改善を促す」と語った。

麗水順天抗争遺族であり、ねつ造スパイ事件被害者

として2代にわたる国家暴力を経験したキム・ヤンギ  
国家暴力生存者会副会長も「無罪判決後も賠償金問題、  
遅延利息未払など国家の不十分な謝罪と補償が問題だ」  
と批判し、「実質的支援を促す」と強調した。

対話ハンマダンを整理し、文ククジュ・全国時局会  
議運営委員長と李錫兌前憲法裁判官は、「国家暴力の悲  
劇と社会的無感覚に対する反省が必要である」「記録と

後続作業、政府レベルの被害者の身元把握と慰労、再  
発防止が重要である」と付け加えた。

一方、韓国・在日同胞音楽人を中心に「11.22 事件」  
及び国家暴力事件の真相究明と被害者の人権回復闘争  
を慰めて励ますコンサート「国家暴力被害者と共にす  
る文化ハンマダン」が22日午後3時、国会議員会館大  
会議室で開かれる予定である。

////////////////////////////////////// 《 訪韓感想文 》 //

《 韓国での「11.22 事件」50周年 》

国家暴力の被害者と共に「対話ハンマダン」「癒しと平和のハンマダン」に参加して

新田和枝（孫裕炯氏を支援する会）

「11.22 事件 50 周年日韓民主民衆連帯の集い」に参  
加しました。「孫裕炯氏を支援する会」に所属していま  
した。当時、裁判傍聴や弁護士を始めとした関係者との  
連携、拘置所に出向いて差し入れ～毎回拒否されましたが～等のために何度か韓国を訪れていました。その頃は、同じ救援会で活動していても渡韓活動を行うのは専ら日本人の役割でした。それが、今は在日の人々や帰日政治犯と一緒に50数人での参加！懐かしい顔ぶれがたくさん。みんな様変わりはしていましたが、感動の幕開けでした。

翌21日。午前中は西大門刑務所歴史博物館の見学。  
日本語のガイドをつけてもらいながらの見学でした。  
観光ガイドのような説明ではなく、民主化運動として  
しっかりと位置付けられていたことに、展示室作成に  
込めた在日韓国良心囚同友会の皆さんをはじめ、たく  
さんの方々の活動が身を結んだのだらうと思いました。  
帰りには貴重な日本語版の資料をいただきました。こ  
の国はどうしたんだ？とつい思ってしまいました。石を  
投げればKCIAに当たると言われた時代は、確かに  
随分前の話ですけれども……。

そして午後。「国家暴力の被害者と共に対話ハンマ  
ダン」の会場、香隣教会へ。これがすごい！広々とし  
たチャペルに豪華な垂れ幕。随分とお金がかかっただ  
らうなと羨ましそうに見ている日本の救援会メンバー。  
帰国するときにはもらったようですが……。ここにも  
通訳が準備されていて、イヤホンで同時通訳を聞くこ  
とができました。もはや気分は国連大使。資料もビデオ  
メッセージも、大変手が込んでいることに感心する  
ばかりでした。後世に、しっかりと残しておくべき資  
料だと思います。何を考え、どうしてきたのか、何が  
真実なのか、民主化運動を担い、犠牲になった方々への  
鎮魂と生きてこの場に集まることができた方々と会  
うことができたことに感謝します。孫裕炯氏のご存命  
ならなんと言われたでしょう……。

22日午前。国立民主化運動記念館見学。ここも通訳  
ガイドしてもらいながらの見学でした。西大門刑務所  
もそうだけれども、ここはまたとんでもなく身の毛の  
よだつ場所でした。正視することは難しく、しばらく  
は頭から離れそうにありません。自分がここに入れら  
れたとしたら、ふとそんな考えが頭をよぎりましたが、  
到底、想像を絶する現状でした。もしも我が子が、親  
兄弟が、友人が……と思うと、亡くなられた方々がど  
れほど無念であったことか。生きて帰ってこられたこ  
とが、どれほど尊いことなのかと思わざるを得ません  
でした。

午後。今回の企画の2本目の柱、「国家暴力被害者  
と共にする癒しと平和のハンマダン」会場、国会議員  
会館へ。こんなところの会議室を借りれるとは！と思  
いつつ綺麗な建物へ。昨日のシンポジウムからすれば、  
歌なんぞと軽んじていたのが愚かだったと悟りました。  
文化の大切さ、力強さを痛感。ここでも国連大使気分  
のイヤホンに頼りながら同時通訳と文字表示に見惚れ  
ていました。なんと演出力の優れていることか。大量  
の人員動員に大量の資料作成、どれほどの人々のご苦  
労が背景にあったのかと感動満載でした。

「対話ハンマダン」も「癒しと平和のハンマダン」も、  
一貫して国家暴力被害者の尊厳が守られていたことが  
もっとも印象的でした。

ところで、参加された皆さんはよく飲まれますね。  
それも昼夜問わず。韓国語をしっかりと習っておけば  
よかったと後悔も。聞きたいことや話したいことがス  
ムーズにできないもどかしさも満載でした。彼の国の  
民主化運動を担う方々は、どんなことを考えていらっ  
しゃるのでしょうか？どんな活動をされてきたのでしょ  
う？何を夢見ているのでしょうか？そして、私、私た  
ちは？

23日帰国。参加してよかったです！！

——「11・22 事件」50 周年——

「国連拷問被害者支援の日」訪韓行動の報告

金 元重（在日韓国良心囚同友会）

在日韓国良心囚同友会は「11.22 事件」50 周年記念事業の一環として6月25日「国連拷問被害者支援の日」記念事業等に参加するため23日～26日にソウル訪問。参加者（日本から）：李哲夫妻、康宗憲夫妻、柳英教夫妻、孫明弘夫妻、金勝弘、金元重、李宗樹、鄭勝淵（25日）、山田隆嗣、住谷章、宮崎勇一、小山帥人、古屋敷一葉、ソウルからは李東石。

■ 6月23日（月）：羽田－金浦アジアナ便、宿所は「全・真・常霊性センター」（ソウル・明洞）。

□ 17：30：仁寺洞で再審弁護団弁護士らと食事・懇談（張慶旭、曹永鮮、沈載煥、宋尚教弁護士、金孝淳、金ジョンチョル記者、陳ヒョンデ夫妻、金榮珍、盧泰勲、金英丸…）。

■ 6月24日（火）：

- ・9：30：西大門刑務所歴史館見学。
- ・11：00：「民家協40周年記念事業会」発足式に参加（明洞・カトリック会館講堂）。

※ 民主化実践家族運動協議会（1985～2025）の40周年記念事業の会。

□ 咸世雄神父らの祝辞に続いて、来賓あいさつの一人として李哲会長挨拶。

□ 記念事業会の報告：安ヨンミン全大協同友会会長

※「民家協のオモニたちは民主化運動家、人権運動家、平和と統一のため活動しました—1980年代軍部独裁政権に立ち向かい民主化を要求して拘束された良心囚たちの家族が集まって「民家協」を作りました。良心囚のオモニたちが多数だった民家協は「家族」の垣根を超えて「人権守護者」として民主主義と人権実現のために闘いました。

民主化要求集会、龍城、デモ現場の最前線で闘い、戦闘警察に引っ張られる学生を素手で救出しました。矯正所で在所者に対する人権侵害が発生すれば、矯正所前で一晩中、闘いました。捜査機関で拷問など過酷な行為が行われた時も、一番最初に駆けつけて拷問・過酷行為中断と責任者の謝罪、そして再発防止を促求しまし

た。オモニ、ありがとうございます。

我々は40年間、民主化運動時代のオモニとして、人権運動家としての犠牲と献身に敬意を表します。私たちは民家協のオモニたちの活動を記録し、あなた方が我々の社会にささげた純粋な熱情と精神を後代に教育し、模範として残しておきたいと思えます。……

1. 記録事業：……
2. メディア事業……
3. 記念式……
4. 学術討論会……
5. その他。」（良心囚後援会資料「良心囚現況25年4月現在」より）

・12：00～：モラン公園（烈士墓地）参拝。

上記集会参加後、レンタカー2台に分乗して、南楊州の磨石・モラン公園へ。

□ 資料・墓域図：全泰壺、朴鍾哲、キムギョンス、金槿泰、文益煥、趙万朝、鄭敬謨……。

□ 趙萬朝オモニの墓前で参拝、記念撮影。

□ 李東石氏によれば7月1日陳斗鉉先生の遺骨の埋葬式が行われた。

・18：30～：本隊は明洞で各種運動団体代表らと会食。安ヨンミン、朴來群氏ら。

金元重は別行動で、18：30金孝淳、李鍾久氏と仁寺洞で会食。

■ 6. 25（水）：10：30～南宮洞の民主化運動記念館見学。この日から鄭勝淵先生参加。

かつての治安本部（警察）の南宮洞対共分室、2000年代に入って警察人権センターを経て民主化運動記念館として開設する作業、6月10日にリニューアルオープン。1階に民主化運動参加者の書簡など展示、5階の調査室は従来通り当時のまま保存。

□ 拷問の拠点：中央情報部—南山、国軍保安司令部—西氷庫、警察—南営洞

前2者は保存できなかったが、南営洞だけは保存して民主化運動教育の拠点に。(映画「1987 ある闘いの真実」(朴鍾哲水拷問致死事件)、「南営洞 1985」(金槿泰拷問事件)の舞台)

・13:00～:「植民地博物館」訪問。金英丸氏の案内で特別企画展「民主主義と旗」展示見学。博物館外壁に123日間の尹錫悦弾劾・罷免集会で使われた各種「旗」を掲示、1階フロアで旗、プラカード、応援棒など展示、動画上映も。

・15:00～:民主化運動記念館多目的ホールで「2025 国連拷問被害者支援の日(1998～)」記念行事参加。11. 22事件の韓国神学大事件 金ミョンス氏、ナ・ドヒョン氏、チョン・ピョンセン氏、釜山大事件のノ・スンイル氏らも参加。全体参加者は200人くらい。

□ 主催：人権医学研究所・金槿泰記念治癒センター(理事長・咸世雄神父)。主管：金槿泰財団、南営洞対共分室を記憶する人々、民青学連継承事業会、民青連同志会、在日韓国良心囚同友会、済州4. 3平和財団、全国民族民主遺家族協議会(遺家協)、正義を求める国家暴力生存者会、民主化運動記念事業会。

□ 李ファヨン人権医学研究所所長の司会で1部、2部とすすめられ、追慕儀礼、参席者紹介、主催・主管団体代表の歓迎辞、再審無罪20年を歩んだ人びとインタビュー(映像)などが続いた。

□ 第2部：2025年感謝牌贈呈では、サプ

イズ！李宗樹氏が在日同胞最初の再審無罪を勝ちとり、その後も在日良心囚の再審の取り組みに献身した功労に対して感謝牌が贈呈された。もう一人は済州「変な家」設立者のカン・グァンボ氏。(2024年の感謝牌は、在日良心囚の救援に尽力した日本の市民団体が受賞。)

□ 資料：今年(2025年)の『資料集』では、去る20年間再審で無罪宣告を受けた「国家保安法」人権侵害事件被害者名簿(2005～2024)一覧表で掲載されている(29ページ)。475名、内約40名が在日。また「国家保安法」人権侵害事件で勲章、褒章が取り消された加害者名簿(45ページ)が公開されている。

□ また最後に人権医学研究所の林采道(イムチェド)氏の「再審無罪20年の歴史と課題」という力作論文が一読に値する。

・17:30～:参加者全員で近くの焼肉店を借り切ってサンギョプサル、マッコリで夕食・懇談。

この席で李哲会長、咸世雄神父、金英丸氏らの話合いの結果、「11. 22事件50周年記念集会」をソウル(西大門刑務所歴史館)で行うこと、大阪集会は12月に延期することなどを暫定合意。

■ 26日(木)ソウルに残る者、帰宅する者、各自別行動

・金元重は12:00～17:00 鍾路永豊文庫、光化門教保文庫で書籍購入、光化門郵便局で海外小包発送。

・19:50 発 金浦アジアナ便、22:30 羽田着、

## 《 記念行事「資料集」より 》

### 【資料集①】

#### 「2025 国連拷問被害者支援の日」記念行事

□ 2025年「感謝牌」授与者紹介 □

李宗樹(最初の在日韓国人再審無罪)

在日同胞、李宗樹先生は韓国語を習得したいという思いで、1981年に高麗大学国文科に入学した。時を同じくして、韓国保安司令部では、「在日同胞留学生を偽装、日本を迂回したスパイを摘発する」という目標を掲げ、430名の留学生の中から40名を捜査対象者として選び出した。

1982年、保安司令部は李宗樹先生の当時の下宿を捜索し「マルクス・エンゲルス小伝」を押収。「国家保安法」違反容疑者として先生を連行、39日間に及ぶ過酷な拷問を加えた。結果、なすすべもなく保安司令部が言うところの「犯罪事実」を認めた。当時の裁判所は、先生の「過酷な拷問による虚偽の自白」という訴えを無視し、懲役10年を宣告した。先生は5年8ヵ月の服役後に仮釈放され、帰日した。

「第一期真実和解委員会」の活動を受け、在日同胞被害者たちは名誉回復をすべく委員会に申請し、先生は2010年7月15日、「拷問による捜査スパイ

事件」という裁判部の判断で、在日同胞として初めて再審無罪を勝ち取った。

これをきっかけに、以降、多くの在日同胞ねつ造スパイ事件の被害者たちの再審無罪判決獲得を支援し、再審運動に貢献、被害者たちの「名誉と生の回復」の呼び水となった。

人権医学研究所は、わが社会において抑圧的な政権による国家暴力の残酷さと被害者の犠牲を世に問い、他の被害者たちの真実究明と再審のために献身的に活動してこられた李宗樹先生に対し、「2025年国際拷問被害者支援の日」に感謝牌を贈呈することに決定した。

### 【資料集②】

#### 「2025 国連拷問被害者支援の日」記念行事

##### □ 歴代「感謝牌」授与者紹介 □

① 2015 年：在日韓国良心囚同友会（中央情報部、国軍保安司令部拷問被害者）

暗鬱な独裁政権下で祖国の民主化と統一のために献身し、反人道的な国家暴力被害者団体として数多

くの在日同胞人権被害者たちの名誉回復のために努力した。

② 2018 年：尹正憲<sup>ユンジョンホン</sup>（在日同胞ねつ造スパイ事件 保安司令部拷問被害者）

国家暴力被害生存者として生命と正義に対する責任感で、拷問加害者の責任を提起した。また、拷問捜査官が法廷拘束される契機を作り、多くの被害者たちの名誉回復と治癒に貢献した。

③ 2024 年：在日韓国人政治犯のための

救援活動を行って来た日本人の市民たち 韓国の抑圧的な軍事政権であまたの在日韓国人が拷問され、ねつ造スパイとして投獄された時、彼らの生命と人権を守り、釈放のために献身的に救援活動を繰り広げた日本の市民たちがいた。本国の多くの韓国人たちが沈黙する中、この日本人市民たちは、長期に渡り韓国人政治犯やその家族と共にあり、良き隣人でもあった。

④ 2025 年：李宗樹（最初の在日韓国人再審無罪）  
【資料集①】

////////////////////////////////////// 《 李在明大統領の公式謝罪 》 //

## 李在明大統領の在日同胞懇談会での謝罪の言葉

——2019年<sup>ムンジェイン</sup> 文在寅元大統領の公式謝罪に続き2度目——

イジェミョン  
李在明大統領「在日同胞スパイねつ造事件に心から慰め、繰り返し謝罪する」  
……頭を下げて公式謝罪！！

① 2025 年 8 月 23 日 在日同胞懇談会（東京）

「そして直視しなければならない恥ずかしくて痛い歴史もあります。偉大な民主化の旅程の中で実に多くの在日同胞たちが無念にもスパイねつ造事件の被害者として苦痛を受けました。私が直接お会いした方々もおられます。大韓民国の大統領として大韓民国の国家暴力に犠牲にされた被害者と家族の皆様にご心より慰めの言葉をささげながら、公式的に再度謝罪を申し上げます。」



2025.8.23 在日同胞懇談会（東京）

② 2026 年 1 月 14 日 在日同胞懇談会（奈良市）

「また独裁政権の時代には国家が日本に居住する在外国民たちをスパイとして造り上げ、ねつ造する事件が多くありました。多数の被害者が作られたそ

の痛みの歴史も私たちは忘れてはなりません。今日、この席に済州4・3の犠牲者遺家族たちをはじめ、ウトロ村の住民会、また在日韓国良心囚同友会の会員の皆さんたちも共にしておられるとお聞きしています。この場を借りて、大韓民国の不幸な歴史の中で被害に遭い、傷を受けられた当事者と遺家族の皆様方に、もう一度、謝罪と慰めのお言葉をささげます。」



2026.1.14 在日同胞懇談会（奈良市）

## 在日韓国良心囚の日本での法的地位の原状回復問題

——大阪総領事館からの報告（2026年3月3日）——

2026年1月14日、奈良県コンベンションセンターで開催された李在明大統領主催の「関西同胞懇談会」の会場で、同友会は「元在日政治犯」の再審無罪者に対する日本国内における「法的地位の原状回復」問題について提起し、「法的地位の原状回復」に尽力してほしいと改めて李大統領に直接、要請しました。

「法的地位の原状回復」問題については、過去、「在日政治犯」を支援された各救援会の方々が、当時の日本の法務省と直接交渉するなど、尽力されてきた経緯もあります。

また、韓国の国会で印在謹（当時、共に民主党議員、故金槿泰夫人）議員が問題提起され、当時の韓国政府（李明博政権）に解決のための努力を要請したこともあります。

今回の私たちの要請を受け、2026年3月3日に



駐大阪領事館・総領事との懇談会（大阪市）

駐大阪大韓民国総領事館を通じ、以下の連絡を受け取りましたので、ご報告させていただきます。

同友会といたしましては、参考資料の提供などを通じ、韓国政府からの要請があれば協力しながら、今後の進展に期待する次第です。

（文責：李宗樹）

「駐大阪大韓民国総領事館の李〇〇と申します。

本年1月の同胞懇談会においてご提起いただきましたご意見につきまして、大統領の指示に基づき関係省庁にて検討いたしました結果を、下記のとおりお知らせいたしますので、ご参考くださいますようお願い申し上げます。

『在日韓国良心囚同友会 李宗樹 様

担当省庁である在外同胞庁の検討結果によれば、在日同胞のうち国家保安法違反等により特別永住者の地位を失った者の現況については、現時点で把握できていないことから、必要に応じて民団等の在日同胞団体を通じた実態調査を優先的に支援する予定です。あわせて、必要に応じて外交ルートを通じ、特別永住者の地位回復に関し、日本政府の協力を要請する予定です。

■■■■■■■■国総■■■■  
実■■ ■〇〇)』

## 柳英数・金英姫夫婦 語りの集い（トークショー）

2025年6月 <sup>イヨンヒ</sup>李泳禧 財団

若かりし頃、祖国で“スパイ”にねつ造され不当な獄中生活を余儀無くされた在日同胞・柳英数 <sup>ユヨンス</sup>氏—<sup>キムヨンヒ</sup>金英姫さん夫妻を、5月27日に招待して「語りの集い（トークショー）」を開催しました。

### 初夏のスケッチ

在日韓国人3世で母国に留学中に“スパイ”容疑で服役した柳英数氏、巨文島の村の少女が不意に“左翼思想犯”になった金英姫さん。光州矯導所で出所後に運命のような出会いと愛で夫婦の縁を結んだ二人。この方々とのトークショーが6月27日午後4時から6時までソウル延南洞“ハノイの朝”3階で開かれました。

金孝淳・李泳禧財団理事長の司会で進行されたこの日のトークショーには、李泳禧 財団会員、及び柳英数・金英姫夫婦と多くの縁を結んできた方々が参加しました。年を取った方々が多くて梅雨が心配でしたが、この日のトークショーはのどかな初夏の天気が迎えてくれました。

この日の行事には意外な人物、歌手の<sup>ノヨンスム</sup>盧英心さんが来られました。財団から盧さんにこの集まりを知らせたのは、開催一日前でした。「私は恥ずかしくてできないので、もし良ければ盧さんに来れるかどうか聞いていただけたらありがたい」という連絡を金英姫さんから聞いて、連絡先をなんとか見つけて本人宛にメッセージを送りました。「日程が調整できず、最後まで居ることができませんが参加します」という返事が来て、時間に合わせて現れたのです。

柳英数氏・金英姫さん二人が見せてくれた胸を熱くする愛と他人に対する暖かい思いやりは、既にKBSのドキュメンタリーである『スパイ』（2021）と『スパイと島の少女』（2022）を通じて多くの人々の心を打ちました。そのうちの一人が歌手として活



動しながら最近では独立映画製作に没頭している盧英心さんです。

ドキュメンタリーを観て、日本の大阪で夫婦が運営する韓国料理店“セント”を訪ねたのでした。盧さんは「集い」のあいさつの中で、“ぜひとも、お二人に会ってみたくったんです”ということでした。盧氏の温かい心性を感じると同時に、こんなに多忙な人に時間を割いてまで来させる二人の魅力とは何なのかと、改めて感動を呼んだ場面でした。

トークショーは柳英数氏の予想外の涙と、金英姫さんの予想された涙の中で、時間が経つのも忘れるほどの雰囲気の中で進みました。

<sup>キムヒョソン</sup>金孝淳理事長は「以前に金英姫さんにインタビューしたときには、5秒ごとに泣かれて大変苦労した」という話を披露されました。ところが今回は、柳英数氏がマイクを握るたびに言葉を続けることができなかつたのです。英数氏が涙するのは過去の苦痛や悲しみのせいだけではなく、韓国民主化運動と友人たちに被害を与えてしまったという罪悪感、それに加えて何らの貢献もできなかったという自責の念がより大きかつたのです。

英数氏は、韓国に来るに至った経緯を振り返る度に、感情が込み上げ涙が溢れました。参席者の一人がハンカチを渡すと“これ、少し汚いね、私のきれいなハンカチを使うよ”と言って意外な冗談で聴衆の爆笑を誘ったりしました。

どういふことで夫婦の縁を結ぶことになったのか？

彼らの恋愛談も、青春男女の純粋な愛についての話だけではありませんでした。祖国を愛したが故に



祖国から見棄てられた在日同胞青年は“これからは途方もないことよりも、自分ができることをしよう。分断の悲劇の中で悲痛な傷を負った金英姫さんを幸せにすることこそ、私ができることだ”と決心し、“この男の人は、どこかネジが外れているみたい”と思いながら求婚を断っていた《島の少女》も、終わりには“私もこの人にとって必要な人になれるかもしれない”と思い、結婚を決心したそうです。

柳英数氏は出所してすぐ金英姫さんに会いに行き、その場で求婚したそうです。“この人どこか頭のネジが外れている？”と思ったり、でも、とっても可哀そうに見えました”と。次の日から英数氏は英姫さんが働いている市場の中の子ども服店の向かいの喫茶店に毎日出勤しました。ある時には家まで歩いて帰る途中、公園のベンチに座り歌ってくれる“歌声がとても良かった”と。

そんなある日、柳英数氏は“帰るのが嫌だ”“今夜は一緒に過ごしたい”と言って聞かない。英数氏の歌が気に入った金英姫さんも嫌ではなかった。近辺にある旅館に入り並んで横になった二人。英数氏は“手だけ握って寝よう”と言ったのは分かるけど、実際、本当に手を握ったまま寝てしまった！という。“この人、酷い拷問を受けたと聞いたけど、実際にそれで男として体に何か問題でも？”と。

いびきをかいて寝ている英数氏の横で眠れない夜



を明かした英姫さんは、“こんなに自分を節制することを知っている人”を信頼する気持ちが生まれたという。英数氏は“生涯にわたり後悔した夜”と言うけれど、彼の願いはこうして叶うことになったのです。お互いの真心が通じ合った決定的な逸話には、聴衆席に爆笑が湧きました。

二人はそれぞれの心に負った深い傷を、お互いへの愛へと重ね合わせて行きました。この日も二人は必ず互いに“柳英数氏”“金英姫さん”と呼んでいました。愛が溢れ、互いを尊重し合う家庭で成長した二人の子どもは、二人とも大学は韓国に行くことを自ら選択しました。

2時間に及ぶ二人の話を全部聞き終えた時、盧英心さんが二人の店を尋ねて行った理由について“痛みや悲しみがあるからというよりも、美しい愛を実現した人”と言った言葉が胸に迫りました。

## 《 報道資料 》

### 《スパイの濡れ衣着せられた在日コリアン》共に拷問を受けた友人は韓国の大物現役政治家 真実和解委「在日同胞・梁南国等人権侵害事件」に被害確認決定 ソウル大学に在学中にスパイとされ、日本に帰った後は行方不明に

ハンギョレ新聞 2025.5.14

青雲の志を抱いて祖国の地を踏んだ在日コリアンの青年、梁南国<sup>ヤンナムグク</sup>さん（1951年生まれ）は、スパイねつ造を企てていた韓国軍保安司令部（保安司、現在の防諜司令部）の餌食となった。梁さんと親しかったチョン・ドンヨン現議員（共に民主党）ら友人たちも、保安司に連れて行かれたうえ、梁さんに抱き込まれたのではないかと疑われ、ひどい拷問を受けた。事件から半世紀が経ち、彼らは国家機関から過去の被害事実を認められた。チョン議員は「とても心優しい友人の梁南国に対する国家暴力事件が明らか

かになって幸いだ」とし、「南国はかなり前から日本で行方不明になっており心配だ」と語った。

「真実・和解のための過去事整理委員会（真実和解委）」は13日午後に関われた第109回全体委員会で、1975年に保安司捜査官たちによって連行され、長期間の違法な拘禁状態で過酷行為を受けた後、国家保安法および反共法違反の疑いで重刑を言い渡された「在日同胞梁南国等人権侵害事件」について、重大な人権侵害があったとみて、真実究明（被害確認）の決定を下した。

また、真実究明対象者の梁さんの他に、起訴猶予処分を受けた未申請被害者のコ・アソクさん、ペク・サンホさん、キム・チョルスさんと、軍服務中に令状なしに取り調べを受けたチョン議員に対する過酷行為など人権侵害事実を確認し、真実究明決定と共に「違法な捜査をした点に対して被害者および家族に公式謝罪すべき」と国家に勧告した。2007年に第17代大統領選候補として出馬した当選5回のチョン議員が、保安司に10日以上監禁され拷問捜査を受けた事実が明らかになったのは、今回が初めてだった。

梁さんは、「在日韓国良心囚同友会」の李哲代表などが2021年9月に真実和解委に真実究明を申請した1970～80年代の在日韓国人人権侵害被害者38人の一人。このうち、第2期真実和解委で真実究明の決定を受けたのは、梁さんを含めて5人だけだ。

真実和解委の調査の結果、民間人に対する捜査権がない保安司は1975年12月1日、ソウル大学に在学中だった在日韓国人留学生の梁さんを令状なしに連行し、同年12月31日に拘束令状が執行されるまで、約31日間不法拘禁した状態で取り調べを行った。チョン議員は約12日、コ・アソクさんは約10日、ペク・サンホさんは7日以上、キム・チョルスさんは約12日間にわたり、不法拘禁状態で取り調べを受けた。保安司が、梁さんとチョン議員などを令状なしに不法拘禁したことは、刑法第123条の職権乱用、第124条の不法逮捕・不法監禁罪に該当し、刑事訴訟法第420条第7号、第422条で規定した再審事由に該当すると真実和解委は明らかにした。

梁さんは1971年、ソウル大学の在外国民教育研究所に入学・修了したのち、1972年にソウル大学国文科に入学。日本と韓国を行き来しながら、対南工作指導員の木村などに教養および指示を受け金品を授受するなどスパイ活動をしたという疑いをかけられ、保安司に連行された。

真実和解委は、梁さんが長期間孤立した状態で捜査官に言われた通りの犯罪事実を自白した点と、同じ時期に保安司に連行され調査を受けた李東石さん、康宗憲さん、李秀熙さんが虚偽の自白を強要された点と陳述した点、同じ被害者のチョン議員など4人が、梁さんが北朝鮮を称賛したりデモを扇動した事実はないと陳述した点などを考えると、梁さんなどは調査過程で自白を強要されたと判断した。

チョン議員は17師団で軍服務中だった1976年4



▲チョン・ドンヨン議員（左）が入隊前、友人のクォン・マンハク慶熙大学名誉教授と撮った写真。（ハンギョレはチョン議員の友人である梁南国さんの写真を探したが、見つからなかった。）  
＝チョン・ドンヨン議員室提供

月頃、保安司の捜査官らによって連行され、ソウル龍山区葛月洞の分室で梁さんと関連した取り調べを受け、およそ10日後に覚書を書いて釈放されたことが明らかになった。チョン議員が連れて行かれたのは、高校の先輩と大学の同期を通じて梁さんと知り合いになったためだ。1972年、ソウル大学国史学科に入学したチョン議員は、国文科に在学中の梁さんと同じ教養課程を受講し、サッカーをしたり、彼の下宿先のルームメイトを紹介したこともあるという。

チョン議員は真実和解委の供述調査で、「保安司の取り調べを受けた当時、梁南国が私を抱き込み対象1号にしたという話をされたが、実際に梁南国はデモを主導するよう扇動したことは全くない。維新体制に反対する立場だった私が、むしろ在日同胞の梁南国を、そのような立場で意識化させようとしたが、梁南国はそのような社会意識もなく、デモに参加した事実もなかった。梁南国は北朝鮮体制について話したこともなく、とても純朴で内向的な性格で、強く自己主張したことが一度もなかった」と話したという。

また、チョン議員は当時保安司での取り調べで、過酷行為に遭った事実も詳細に供述した。チョン議員は「当時、モナミ153のボールペンの芯がすり減るほど、非常に多くの陳述書を作成した」とし、「知っていることを全部書き出せと言われ、北朝鮮の方言を使っていた捜査官が『お前を殺してからバラバラにして海の下水道に入れてしまえば済むことだ』と脅し、10日間ひどく殴られながら取り調べを受けたため、心身ともに疲弊した状態で帰隊した」と陳述した。

チョン議員は、同事件以前の1974年には、民青学連事件で拘束され、起訴猶予で釈放された後、強制徴集された。チョン議員は12日、ハンギョレの電話インタビューで、「民青学連事件の時は、1024人が調査を受け、180人余りが拘束されたため、角材で殴られる程度だったが、保安司では水拷問を除

いてあらゆる拷問を受けた」と語った。チョン議員は電話の途中、昔の記憶を思い出して言葉に詰まる場面もあった。

一方、真実和解委は、真実究明当事者の梁さんに対する供述調査を実施しようとしたが、梁さんの所在を把握できなかった。1971年に梁さんとともにソウル大学の在外国民教育研究所に通い、同時期に保安司によって他の事件で逮捕され、再審で無罪判決を受けた在日コリアンの李東石さん(73)は、ハンギョレに「梁南国は1979年の光復節に釈放されて日本に帰り、私は翌年、釈放された後、1982年に日本に渡って、数回会った記憶がある。当時、

税務士資格証を取るため、塾に通いながら朝夕とも新聞配達の仕事をしていると言っていた。しかしその後、家族に行先も知らせず姿を消した」と話した。李さんは「梁南国が保安司に連れて行かれ、拷問を受けたことで大きな衝撃を受けたもの知っている」と語った。

チョン議員は「友人の梁南国は、残忍な軍事政権が犯した国家暴力の犠牲者」だとし、「MBC記者時代、日本に行くたびに在日韓国人団体の民団などを通じてあらゆる方面で探したが、行方が分からなかった。生死の確認ができず、とても残念だ」と語った。

【コ・ギョンテ記者】

## 《 報道資料 》

国家によって「スパイ」夫人・「赤ちゃん」の子との汚名を被った

### 統一革命党「復興委員会事件」再審無罪の朴キレ先生家族への最終陳述

OhmyNews (オーマイニュース) 金ジョンフン 2025.3.8

「国家は私たちにと“スパイ”の奥さんと“赤ちゃん”の子という汚名を課し、身元調査と罪悪感の連鎖によって指をさされて、排斥されました。だから、うまくやっていた学業も、友人と交際もできず、学生時代をあきらめなければなりませんでした。」

5日午後、故・朴キレ先生の息子である朴チャンソンは、ソウル中央地方裁判所の356号法廷で判事たち(第14民事部門)に向かってこう語った。

朴氏は「原告と朴キレ先生の遺族への不正義と絶望をいくらか和らげるよう裁判所に強く要請する」とし、「被告の大韓民国も裁判所の判決を尊重し、原告たちの深い憤りが癒され、回復し、日常生活に戻ることができるよう協力することを心から願っている」と述べた。

朴キレ先生は朴正熙政権時代、いわゆる「統一革命党再建委事件」に巻き込まれ、1975年に死刑を宣告されて、減刑され、17年間、服役した。去る2023年5月18日に死刑宣告後48年ぶりに最高裁判所で「再審無罪判決」を受けた。朴先生は減刑され、1991年に出所し、2012年に死亡するまで統一運動に取り組んだ。

統一革命党再建委事件は1974年10月1日に発生した事件だ。「民主守護同志会」を結成して活動していた在日僑胞の陳斗鉉氏と、韓国で活動した朴キレ氏、金テヨル氏、軍人だったカン・ウルソン氏



▲「上告審無罪」万歳を叫ぶ故・朴キレ先生遺族 (2023.5.18)

などが保安司令部(現国軍防衛司令部)に連行され、拷問を受けて「統一革命党再建委」という事件で起訴された。カン・ソンソン氏と金テヨル氏は処刑場の露に消え、死刑執行を免れた朴キレ氏と陳斗鉉氏は無期で減刑された。

朴氏が亡くなった後、残った遺族たちは2018年12月にソウル高等裁判所に再審を請求した。これは民間人を捜査する権限がない保安司令部(現国軍防衛司令部)が、令状なく逮捕・監禁して捜査し、暴行や拷問などの過酷行為により、虚偽の自白をしたという理由からだ。ソウル高等裁判所は2020年5月に再審を決定した。

しかし、検察は異例にも再審事件で無期懲役を求めた。当時、法廷での朴氏の証言に対する圧力はなく、自白は弁護人の協力を得て行われたため、証拠

能力を認められるべきだと主張した。

2022年9月27日、再審裁判所は彼に無罪判決を下した。裁判部は「令状なしで保安司に連行され、外部との連絡が遮断されたまま違法逮捕・拘禁された状態で捜査を受けた事実が認められ、捜査過程で過酷行為を受けたと見られる相当な可能性がある」と判断した。

2023年5月18日、最高裁判所も彼に無罪判決を下した。2023年9月、遺族らは約26億ウォンの損害賠償を求めて韓国政府に対して訴訟を起こした。

以下は、最後の裁判で遺族を代表した朴チャンソン氏の声明の全文である。

「こんにちは。原告の朴チャンソンです。原告を代表して簡単な陳述をします。

国家が私たち原告に“スパイ”の奥さんと“赤ちゃん”の子であるとの汚名を付け、その結果、彼は身元調査や連座制を指摘され、追放され、学業も友人との交際もできず、学校生活を諦めなければならなかった。

原告の朴チャンソンと朴ヒョンナムは、“スパイ”の子どもという理由だけで、元軍人が管理する学校や軍隊で殴られ、自殺未遂、強制退役のために、学校や兵役に適切に出席できなかった。

教師生活していた原告・朴ヨンスクも連座制で教職から強制解任され、身元照会にかかって就職することができませんでした。

さらに、極左や共産主義者の子孫という汚名のため、市民活動もきちんとしてすることができず、結婚生活の破綻などの苦痛を経験しなければならず、連座制のため国や公共企業に就職もできないなど、レッ



▲朴キレ先生に対する死刑判決の内容が含まれた。  
= 1975年3月19日付の東亜日報

テルを貼られてひどい苦痛の中で暮らさなければなりませんでした。

さらに朴キレ先生の奥さんである原告ソ・スンジャ夫人は、何度か軍安保室に連行され、民間人女性であっても軍服に着替えたまま捜査を受け、国家から持続的な監視を受けただけでなく“スパイ”の妻というタグの下で暮らしながら、あらゆる屈辱と痛みを苦しまなければなりませんでした。

原告が国家賠償で韓国から請求する金額は、朴キレ先生と原告が長期間にわたって苦しんできた血の苦しさと悲しさと比べると、ごくわずかなものである。

したがって裁判所は、原告が訴訟代理人を通じて提出したすべての文書と資料を考慮し、原告の不正と絶望の感情をいくらか和らげるよう真剣に要求する。

また、被告である大韓民国が、朴キレ氏及び原告に対する過去の過ちを謝罪する目的で裁判所の判決を尊重し、原告の深い憤りが癒され、回復され、日常生活に戻ることができるよう協力することを切に希望する。以上です。」

オーマイニュース（市民記者）

#### 【編集後記】

- 「11・22」事件50周年を期して、初めての「ソウル開催」と「日本（関西）開催」のドッキングが実現しました。「50周年（半世紀）」とひと言で言いますが、「同友会だより」を手にする仲間のみなさんにとって、それぞれの生き様と重ね合わせると、そこにはさまざまな貴重な取組みの共有があり、次の世代につなげる大切な成果があると確信し、特集を組みました。
- 私たちの永い地道な取組みを表現するかのよう、この一年間で、また貴重な先輩や、いっしょに汗を流した大切な仲間の哀しい訃報が続いています。
  - ・2025.2.22 石井宏氏      ・2025.4.6 滝沢秀樹氏      ・2025.4.26 権五憲氏
  - ・2025.5.20 中尾律彦氏      ・2025.5.28 吉松繁氏      ・2025.10.22 鄭勝淵氏冥福をお祈りいたします。いつの日か天国で再会して、思いっきり“夢”を語り合いたいものです。（合掌）
- 事務局では、記念誌『分断克服と民主主義を求めて～在日韓国良心囚同友会の35年史～』の発行に続けて、遺稿集『私の記録（仮題）』（高乗沢・著）の編纂を進めているところです。ぜひとも高乗沢さんの熱い意志に触れていただきたいと思います。
- 韓国では「第3次真実和解委員会」が発足し、また複数の在日韓国良心囚の再審公判の準備が進められております。変わらぬ温かいご支援をお願いいたします。【T】